

地を這う虫は空を望む

しろねこパンチ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年は憧れた。揺るぐことのない本物の関係を。

少年は憧れた。何でも解決してしまう最底辺の少年を。

少女は憧れた。檻から出してくれた捻くれた少年を。

同じ高校に属し、底辺と頂点の2人と檻の中の少女はデスゲームを生きる。

# 目

# 次

S  
A  
O  
編

再会	92	底辺の少年	1
修羅場	83	檻の中の少女	
秘密	74	頂点の少年	
休日	66	邂逅と思惑	
嫌われ者	57	ベータテスター	
	47	最悪のパターン	
	37		
	28		
	21		
	11		
	1		

依  
頼



## S A O 編

## 底辺の少年

俺は彼女に憧れた。

凛とした佇まいに栗色の長髪を靡かせ、確固たる信念を持つ彼女に。

初めてあつた時、頭に浮かんだのは流れ星だ。美しい栗色の髪がライトエフェクトにより煌めき、一筋の軌跡を残した。現実で出会つた黒髪の少女に似ていたが似て非なるものだつた。そんな彼女に憧れた。

しかし理性が叫ぶ声が聞こえた。

『図に乗るな、俺如きがそんな綺麗な物に縋つてはいけない。自分の立場を自覚しろ、光の当たる場所など、地を這う虫が空を飛ぶ鳥に憧れるなど烏滌がましいにも程がある』

俺はあいつに憧れた。

笑われ、蔑まれ、認知すらされず、学校中の嫌われ者になつても変わら無いあいつに。

自分と比べると全てが劣つているのに俺に出来ない事をあいつはやつてのける。

修学旅行でグループ内のいざこざがあった時も、文化祭で問題が起こった時も、俺は何も出来ずただ彼に助けられるばかりだつた。いくら勉強が出来ても、いくら友達がいても、いくらスポーツが出来ても、大事な時に何も出来ないのが悔しくて堪らなかつた。しかし本能で察してしまつた。

『俺ではあいつにはなれない。現状を失う事を恐れ、動き出す事を躊躇う。空飛ぶ鳥は地を這う虫にはなれないのだ』

私は彼に憧れた。

皮肉屋で捻くれてて口を開けば働きたくないと言う彼に。

自暴自棄になつていた私を救つてくれて、普段だらしないのに、肝心な時は一番頼りになる。私より1つ年上でまるでお兄ちゃんみたいな彼は私の心の支えになつている。今まで感じたことの無い感情が湧き上がる。

『彼のそばにいたい。彼とお喋りしたい。彼に触れたい。彼の役に立ちたい。彼になら私の全てを捧げられる。』

~~~~~

『これにてチュー・トリアルは終了する。諸君の健闘を祈る』

俺はなんどデスゲームに巻き込まれてしまつたらしい。学校で色々やらかし過ぎて

居心地が悪く、嫌な現実から逃げるために小遣いをはたいて買ったんだがこんなことになるなんてな。

「ふざけんじやねえええ！とつとどこつから出しゃがれ！」

「嘘だッ！！」

「この後彼女と約束あんだけよ！」

「お母さーん！お父さーん！」

あれ？どつかで聞いたことあるようなセリフが：それとリア充乙wざまーないぜ！

このゲームR13じやなかつたのか？どう考へてもまだ10歳前後の子が何人もいるぞ。

現実逃避はこのぐらいにして今やるべきは情報収集とレベリングだな。デスゲームとなつたこの世界を生き抜くためには情報が必要だ。ベータテスターとかつていつた経験者がいるはずだからそいつを見つけて情報を……俺コミ症なの忘れてた！八幡うつかりテヘペロ！……キモイな。まあ情報に關してはぼつちの特技の1つ人間観察でどうにかするとしてレベリングはどうするかな。ステルスピツキーが使えればいいんだが。

「クラインこつちに来てくれ」

「どうしたんだよキリト」

今後の方針を考えていたら2人のプレイヤーが近づいてきた。2人は俺の横を通り路地へと入っていく。

「デスゲームとなつたこの世界で生き抜くためにはひたすら自分を強化するしかない。始まりの街周辺の狩場はすぐに他のプレイヤーで埋め尽くされてろくにレベリングなんて出来なくなるだろう。だから早い段階でこの街を出た方がいい。ここまで一緒にやってきたからこそ言うが一緒に出ていかないか？」

「キリトの気持ちはスゲエ嬉しいけどよ、連れがこの街にいんだ。そいつ等を置いては行けねえよ」

すぐ横にいる俺に気付かず話を進める2人。あれ？俺認知されてない？あ、いつも通りだね！」

「そうか……じゃあ俺は行くよ。じやあなクライイン」

「おう！いろいろありがとよキリト。そういうえばお前けつこう可愛い顔してんだな！」

「お前もその野武士面の方が100倍似合つてるぜ！」

そう言つてキリトと呼ばれた少年は走つていった。キリト……か、使えそうだな。ステルスヒツキーを全開にして走り去るキリトとやらを追いかけてた。

黒髪の少年、キリトを追い掛けていると小さな村に着いた。キリトが倒し漏らしたモンスターをステルスヒツキーを使って高確率でクリティカルを出しながら倒していたラベルが4に上がった。キリトは宿へと入つていった。中の様子を伺うとどうやらクエストを受けたようで直ぐに出てきた。そのまま村を出て森の方へ向かっていくのでそろそろかと声をかけた。

「おい、ちょっとといいか?」

「誰だ!?

キリトは初期装備のスマートソードを構え臨戦態勢となつた。

「おいおいおい! いきなり話しかけたのは悪かったがそこまで身構える必要があるかよ!?

「俺の索敵スキルでも看破出来ない程の隠蔽スキルを使って近づいてきたくせに何言ってんだ!」

索敵スキルと隠蔽スキルってのは何のことだ? 話がみえないな。

「落ち着け。それと聞きたいんだが索敵スキルってやつと隠蔽スキルってのは何のことだ?」

「とぼけるな! 俺に気付かれずにここまで近付いて来たんだ、お前PKだな!」

PK……プレイヤーキルの事か? つまりこいつは俺がこいつを殺しに来たと勘違い

してゐるつて事か。

「待て、冷静に考えろ。仮にここでお前を殺したとして俺に何のメリットがある。PKで経験値が稼げるならまだしもSAOはそんな機能は無いだろ？俺は単にお前がベータテスターだと知つて情報収集のために話しかけただけだ」

「…なぜ俺がベータテスターだと知つてゐるんだ？」

「始まりの街で…クライインと言つたか？アイツとお前が話してゐる時俺はすぐ近くにいたんだ。全く気付かれなかつたもんでそのまま話を聞かせてもらつた」

「それこそおかしい。あの場で他の存在に気づかないなんて有り得ない」

まつたく、情報を持つてゐるやつは自分の知つてゐる事以外信じようとしないのはなんになのかね。無知の罪で逮捕されちまうぜ？

「それじやあ…これで信じるか？」

そう言つて俺はステータスウインドウを可視状態にしてキリトに見せた。

「よく見ろ。俺はスキルは片手剣しか取つていない。つまりお前の言つてゐる隠蔽スキルとやらは使えないんだ」

キリトの表情はウインンドウを見ると驚愕に染まる。

「ホントに隠蔽スキルが無い…じゃあさつきまでどうやつて隠れてたんだ？」

ステルスヒッキーを使い気配を消すとまたしてもキリトの表情は驚愕に染まる。

「なんで姿が朧気に見えるんだ。索敵スキルは正常に働いているし、油断したら見失いそうだ。どうやつたらそれできるんだ？」

「ボツチになる」

「は？」

「ボツチになつて周りから認知されなくなれば出来る」

「ボツチってソロつて意味か？」

「そうじやない。誰からも認められず、見くびられ、馬鹿にされ、孤立する事」

「俺もリアルじやボツチだつたんだけどな」

「……お前いじめられたことあるか？」

目がキモイとかそんな理由で教科書を隠されたり、殴られた。

「遠足みたいな集団行動で置いていかれたことは？」

点呼しても忘れられ、気付いていてもあえて置いていこうとした奴がいた。

「教師にすら名前を覚えてもらえなかつたことはあつたか？」

いくら訂正しても教師共は「ヒキタニ」としか呼ばなかつた。

「お前の言うボツチはボツチじやない。極わずかにしか友達のいないコミ症だ」

「確かに友達は二、三人くらいしかいなかつたけどその程度じや」

「俺には友達と呼べるやつなんて1人もいない」

そう、みんな他人だ。クラスメイトであつても1人とて名前を覚えてないし、覚えてられない。あの場所で可能性のある奴が2人いたが結局は俺の勘違いだつた。

「だからお前には無理だ」

話を終えるとキリトは申し訳ないような気まずいような顔をしていた。しかし俺と

した事がやけにべらべらと喋ってしまった。そろそろ当初の予定を進めなければ。

「俺の話はどうでもいい。それよりお前に聞きたい事がある」

「……」

「この世界についてお前が知っている事を全て話せ」

そう今欲しいのは情報だ。誰かが人間は自分の理解出来ない物に恐怖するとか言つていた。今正しくその通りだ。この世界のどこで何が起こるのかまったく分からぬ、どこにどんなモンスターが出るのか、どれくらいの強さなのか等知りたいことは山ほどある。

「ベータテスターのお前はそれだけの価値がある」

ベータテスターはこの世界でニュービーである俺達より大人と赤子程の差がある。右も左も分からぬ今この世界を生きる術を持っているやつとコンタクトを取るのは必須だ。

「…一つだけ聞きたい」

しばらく喋らなかつたキリトが口を開いた。

「あなたの話を聞く限り、あなたにとつて現実はクソだつたんだと思う。それなのにどうしてそこまで生きようとするんだ」

生きようとすると…ね。そんなの決まつてゐる。

「妹にもう一度会うためだ」

「は？」

「妹だけは俺を見てくれていた。心配してくれた。俺のために努力してくれた。そんなあいつに俺は何一つ返せていない。だから俺は生きて現実に戻る」

妹は、小町だけは俺の味方だつた。たまにごみいちゃんなんて言われるがあいつがいなけりやとつくに自殺してただろう。

「これで満足か？」

キリトは俺の目を真っ直ぐに見てゐた。

「ああ、充分だ。あんたに俺の知つてる事教えるよ」

やれやれずいぶんと時間がかかつたな。しかしこれで俺の第1目標は達成で「そのかわり！」きたとは虫が良すぎたか。

「なんだ」

「そのかわり俺とパーティーを組んでくれ」

「なん……だと？……これは予想外の返答だ。

「あんたの事もつと知りたいんだ。あんたといえば俺はもつと強くなれる気がする」  
どうしたものか。出来ることならソロでいたかつたんだが。キリトは今までの戦闘  
を見る限りかなり強い、すべての戦闘で危なげなシーンは一度も無かつた。キリトとい  
るメリットはかなり高い、ここは俺が妥協するべきか。

「分かつたその条件を飲む」

「よし、これから申請を送る、これからよろしく頼む、えつとそういうえば名前を聞いてな  
かつたな」

「そういやそうだな」

「h a c h i m a nでハチマンだ。よろしく頼む」

## 檻の中の少女

キリトとパーテイーを組む事になつてから約1ヶ月が経過した。キリトに戦闘のいろはから街の細々とした作りまでいろいろな事を教わつた。パーテイーを組んではぐにキリトが受けていたクエストを手伝つていたが、まさかMPKを受けるとは思つてもいなかつた。まあステルスヒツキーを使つたら余裕でたおせたが。その時キリトが「目を持たない植物系モンスターに隠蔽スキルは聞かないはずなのになんでバレないんだ」と呟いていたがそんなの知らん。まあそのおかげでいまのレベルは17まで上がつた。パーテイーを組んでいたキリトにも経験値が入りキリトのレベルは15らしい。

「この世界に来てもう1ヶ月か、早いな」  
「ベータでの進行スピードから計算しても2年はかかるんだ。1ヶ月なんてまだまだだよ」

「しかしこれは予想外だ」

「デスマゲームが始まつて1ヶ月、まだ第1層すら攻略されていなかつた。

「でも今日アレあるんだろう?」

「ああ、トルバーナで開くらしい」

アレとは第1層攻略会議である。キリト紹介の情報屋、鼠から買つたんだが、どこぞのパーテイーがボス部屋を発見したらしい。キリト曰くここまで時間がかかったのはベータの時と迷宮区の作りが変わつており、ベータテスターが自分の持つ知識で余裕綽々と進んだ結果、死者が続出したためらしい。

「んじやこいらで今日の探索は終わりにするか」

「そうだな、安全マージンは充分だし会議までゆっくりするかハチ兄」

「……ああ」

ハチ兄、いつの間にか俺はキリトにそう呼ばれていた。キリトに聞いたら

「ハチマンつてなんか面倒見良さそうだし、現実では妹もいるんだろう？それに俺に兄貴がいたらハチマンみたいな兄貴だつたらいいって思つてさ」

弟か、小町つて妹がいればいいと思つていたが案外弟つてのもいいもんかもしれんな。あの川、川越？口？まあ川なんとかさんの気持ちがわからんでもないな。ブランコに目覚めそうになりつつもポップするモンスターへの警戒は解かず出口を目指した。迷宮区の安全地帯を少し過ぎたところで1人のプレイヤーがモンスターと戦闘していた。ロープを装備しているため顔は判断されましたが出来ないが、体格からして女であると判断できた。対峙しているのはコボルト・トルーパー、第1層の迷宮区の上位モンスターで攻撃を3回連續で躰すと大きくよろけ隙が出来る。ロープの少女はふらふらと

した足取りながらもコボルトの攻撃を3回連続で躱し隙だらけの首元へ細剣単発スカルのリニアーを繰り出した。細剣がコボルトの首を正確に突き刺しコボルトをポリゴンとなり爆散した。その姿はまるで流れ星のようだつた。ライトエフェクトが一筋の流れ星となつてコボルトへと落ちた、そんな感じだつた。ローブの少女は爆散するポリゴンに押し返されるようにあとさずり壁にぶつかるとずるずると崩れ落ちた。呼吸が荒く長時間戦闘を繰り返していたことが推測された。キリトがローブの少女に近付いて今の戦闘について説明していた。話を聞く限り少女はこの手のゲームをやつた事がないらしく、キリトの話をあまり理解出来ていなかつた。

「そいつが言つてることを粉々に噛み砕くと数学のテストで暗算で出来る計算を筆算して時間を無駄にするようなもんだ」

「ゾンビ!?」  
「ブフッ！」

ローブの少女は後ろに下がろうとしたが壁にもたれかかっていることに気付き、ぶるぶる震えながら来ないでとつぶやいている。なにこれめっちゃ傷付くんだけど、おいキリト何笑つてんだぶつ殺すぞ。

「あー、俺はゾンビじゃねえ、プレイヤーだ。だからそんなに怯えなくていい」「あ、えつと、ごめん…なさい」

「あーあハチ兄女の子泣かせギヤツ！」

「ちょっとキリト黙つてろ」

ダメージの入らないギリギリの強さでキリトを殴る。

「…兄弟なんですか？」

「いやこいつが勝手に言つてるだけだ」

「まんざらでもないくギヤツ！」

「マジで黙つてろ」

「フフツ！」

俺とキリトの馬鹿馬鹿しいやり取りが面白かったのか、ロープの少女は笑みをこぼした。

「ごめんなさい、少し面白くつて」

「いや気にしなくていい。ところでなんでそんな状態になるまで迷宮区に籠つてるんだ？」

「…私が私であるためよ」

先程の朗らかな雰囲気とは一変し、達観したような諦めたような口調だ。

「こんなことに巻き込まれて私は周りの人達に置いていかれちゃう。1ヶ月も経つたのにまだ1%もクリア出来てないんだもの。この世界から出た時、私は元の生活には戻れ

ない、だつたら例え現実ではなくても、私のままで終わりたい」

少女の話を聞いて黒髪の少女を思い出した。彼女も家族に縛られ、怯え、自分の意思などなく、ただ引かれたレールを歩くだけの彼女を。大事な存在になりつつあつたがそれは幻想だつた。俺を否定し、遠ざけた。

「なああんた」

俺は他人なんかどうでもいい。自分と近しい人がいればそれでいい。あいつみたいにみんな仲良くなんて思わないし思えない。

「1つ聞きたいんだが」

だからこれは気の迷いとか、出来心とか、そんな曖昧で不確かで俺のキャラじやないのは充分承知のうえなんだが。

「あんたは本当にこの世界で死にたいと思つているのか?」

少女の返事は待たず言葉を続けた。

「自分のままで終わりたいとか言つてたがこのままじゃあんたは何者でもなくただ野垂れ死ぬだけだ」

頭でかんがえる前に口が動く、言葉を発する。

「現実からじやこつちのことはまったく分からない。あんたを知る人たちはただあんたが死んだとしか分からない。それにさつきみたいに無理無茶無謀を繰り返して死んで

もそれはあんたの自己満足であつてあんたであり続けた証明にはならない。証明出来  
る奴がいないからな」

少女は苛立ちを込めて声を張り上げる。

「じゃあ…私はどうしたらしいんですか！あなたに！私を知らないあなたに！何が分か  
るつて言うんですか、どうしろつて言うんですか！」

少女を知らない俺に言えるのは1つ。

「生きろ」

少女が少女でいるための証明を残すために俺が考え付く最善な事。

「どうゆう…ことですか」

「この世界はゲームだ。ゲームである以上データ内にログが残る。あんたが生きて、足  
搔いて、努力して、この世界にあんたという存在を刻み付ければいい。それは誰が見て  
いなくても確かに残るあんたがあんたであつた証だ」

少女は無言で俯いていた。自分のやろうとしていた事を否定されたんだから無理も  
ない。まあ否定したのは俺なんだけど。キリトを見ると俺達の会話に飽きたのか少し  
遠いところでモンスターを狩っていた。おいちよつと待て、俺を1人にするなよ。通報  
されちゃうだろ。数秒の沈黙のあと少女が口を開いた。

「私は、この手のゲームで遊んだことがありません。親から言われたことしかしてこな

かつたから。専門的な事を言われても理解出来ません。だから死んでしまうのも時間の問題だと思つてました。でも、ただ死んでしまうのでは悔しくて、がむしやらにモンスターを倒しました。何かをやつて死ぬなら何も出来ずに死ぬよりましだったから」

「あなたは死にたいのか？」

「どうせ死んでしまうんですからいつ死んでも同じですよ」

「そんな事を聞いてるんじゃない」

俺はそんなことを聞きたいわけじやない。それは結果だ。俺が聞きたいのは前提だ。

「あんたは死にたいのか、生きたくはないのかと聞いているんだ」

どんなアニメでも小説でも死にたがりはろくな末路を迎えない。あるのは空虚な自己満足と残された者達の後悔だ。

「…そんなの、生きたいに…決まってるじゃないですか！」

少女は吐き出すことの出来なかつた思いを吐き出した。

「ほんの出来心でやつたゲームに閉じ込められて、ＨＰが全損したら現実の私も死ぬ？そんなこと言われても認められません！まだ私はあの世界でやりたい事が沢山ある！友達と喋つて、好きなことをして、私を想ってくれる人を見つけて幸せになりたかつた！それなのに、それなのにどうしてこんなことに…」

少女の慟哭は歳相応のものであり、人として当たり前のことだつた。茅場晶彦、お前

はこの少女の慟哭を聞いているか？お前はお前の自己満足にこんな少女を巻き込んだ。ナーヴアギアを被つたの彼女の責任かもしれないがこんなことに巻き込むのはまちがつている。

「だつたら、こんなところで自暴自棄になるのはだめだ。考える事を放棄したらそこで終わりだ」

少女には才能がある。さつきのソードスキルもそうだが、上に立つものの品格と言つたらいいのか、凡人とは違う何かを感じる。こんなところで終わらせるわけには行かない。

「じゃあ…私はこれからどうやつて生きていけばいいんですか？一人じゃ何もできません。ゲームなんてわかりません」

確かに少女一人では何も出来ないだろう。少女だけでなく人間は一人では何一つ成すことは出来ない。ならばどうするか、それは簡単だ。

「あいつを使えばいい」

1人で出来ないなら誰かを頼ればいい。そう言つて奥でモンスターを狩つていたい  
るキリトを指差した。

「あいつはベータテスト、正式サービスが開始される前からこのゲームをプレイして  
いるからそこのらのプレイヤーより多くの情報を持つてる。俺もそこに目をつけてあ

「いつとつるんでるわけだが」

「つまり、彼にゲームを、この世界について学べって言つてるんですか？」

「そうだ。それが今できる最善だ」

「…あなたはどうしてそんなに私に良くしてくれるんですか？」

「良くしてくれる…か。」

「別に特別何かあるわけじやない。ただあるとすれば強いプレイヤーが増えれば俺が楽  
できると思つただけだ」

「…素直じやないんですね」

「うつせ」

本当の事を言つたのに歪曲して伝わつてしまつた。まあ、否定もしないが。

「それで最初に私は何をしたらいいんでしょうか？」

「そうだな…とりあえず俺達のパーティーに加われ。それからあいつからいろいろ聞く  
といい」

そう言つて少女にパーティー申請を出す。

「俺達ということはあなたも一緒なんですね？」

「そなだが、いやか？」

「いえそなではなく、ただの確認です」

少女がOKボタンを押すと左上にもう一つHPバーが追加された。

「そういえばまだ名前を言つてませんでした」

少女はローブのフードを取る。栗色の髪がふわりと流れ、10人いれば10人が振り返るであろう笑顔で言つた。

「私はアスナです。これからよろしくお願ひします」

# 頂点の少年

アスナとパーテイーを組んでからすぐ迷宮区を出て、会議の開催されるトールバーナへと向かつた。道中アスナのステータスを聞いたが迷宮区に籠り続けていたためレベルは13となかなか高かつた。それでも本来はかなり高いらしい。キリト曰く俺の場合は異常らしい。本来避けるべきリトルペネットの実付をあえて狙つてレベリングをしていていたのだがキリトや最近知り合つた情報屋からは自殺志願者やら薬でキメてのかなどと大変失礼な事を言われた。隠蔽スキルとステルスヒツキーを併用すれば気付かれないと大変失礼な事だ。ウイークポイントにスキルを叩き込めば一撃で屠れるし、実付をやればゴ○ブリよろしく湧いてくるので安全でなおかつ効率もいい最高のレベリング方法だと思つたんだがな：

俺の話のあとはアスナに戦闘のいろはを教えた。スイッチやローテなど集団戦闘で必要なことや、アスナのバリバリ初期装備をできる限り強化するための方法など、話は尽きることなくトールバーナに着くまでの時間はあつという間に過ぎていった。

トールバーナの噴水広場、ここが今回の会場だ。噴水の周りには30人程のプレイヤーが集まつていた。

「はーい！そろそろ始めたいと思いまーす。そこの人達、あと3歩こつちに来てくれ！」

材木座だと？中二病デブと思しき声の主は長身で青髪の片手剣使いだ。

「オレの呼びかけに応じてくれてありがとう！とりあえず自己紹介しとくな！オレはデイアベル、気持ち的に『ナイト』やつてます！」

おいおいいいくら何でも声似すぎだろ、キモイわ。しかも『ナイト』か、若干中二病が混じつてなくもないかもしだれん。しかしあの中二病デブとは打って変わって、冗談交じりに自己紹介する彼はなぜこんな奴がVRMMOをやつてているのかと思つてしまふほど のイケメンだった。しかもコミュ力がカンストしているようだ。クソ、爆発しろ。

「さつそく本題に入るけど昨日オレ達のパーティーが、ボス部屋を発見した！」

集まつたプレイヤー達からどよめきが起ころ。

「1ヶ月、ここまで1ヶ月かかつたけど・・・それでもオレ達は示さなきやならない、ボスを倒して第2層に行つて、このゲームはクリア出来るんだと他のみんなに教えてやるんだ！それがオレ達トッププレイヤーの義務だ！そうだろみんな！」

喝采が沸き起こる。あのコミュ力：あいつを思い出すな。天地がひっくり返つても相容れないだろうあの男とは。現実の事を思い出していると和氣あいあいとした雰囲気が一変した。

「ちよお待つてんか、ナイトはん」

「雰囲気を切り裂くように低い声が広場に通る。人垣が割れ声の主が見える。小柄だががつしりとした体格に特徴的な髪型、やや大型の片手剣を背負うその青年はデイアベルの美声とは正反対のダミ声で唸つた。

「コイツだけは言わてもらわんと、お仲間ごつこは出来へんない  
いるんだよなあ、こうゆう空氣の読めない自己中心的な奴つて。

「コイツつてのは何の事かな？でも発言の前に名乗つて欲しいな」

青年は鼻を鳴らし数歩前に出て名乗り始めた。

「わいはキバオウつてもんや。こんなかに詫び入れなあかん奴らがいるはずや」

「詫び？ 誰が、誰にだい？」

「決まつとるやろ！ ベータ上がりのクソ共が！ 死んでいつた2000人にや！」

キバオウが吼えるように話し出す。

「ベータ上がりのクソ共はある日からすぐ始まりの街から消えよつた。そして旨い狩場を独占して自分達ばかりつよいなりおつた。こんなにもおるはずや、知らん顔して仲間に入れてもらおう思てる小狡い奴らが。そいつらに土下座させてアイテムとコルを出して貰わんと。パーテイメンバーとして命は預けられへんなあ！」

ベータスターであるキリトは苦虫を潰したような顔をしていた。おそらくあの野

武士ヅラの男を思い出しておるのだろう。しかし……あいつはアホか？ 今この瞬間にそれについて言及することはデメリットしかない。実力のあるテスターとニュービーの間に亀裂を生み、不協和音を起こす。これは最悪だ。

「おいそこのモ○っとボール」

「だ、だれがモ○っとボールやねん！ てかどこにいるんや姿をみせえ！」

「後ろだ」

「のわあ！？」

モヤつとボール：長いな、キバオウだつたか。キバオウがべらべら喋っている間にステルスヒッキーを使って回り込んだ。こんなのも気付けないなんて雑魚だな。ふとキリトたちの方を見るとキリトは手を頭にやり、アスナは驚いたような顔をして俺と俺がいた場所を交互に見ていた。

「どつから出よつたんや！？」

「普通に近付いたんだが？」

「アホか！ そんなんやつたら気付けん分けないやろ！」

「そんな事はどうでもいいんだが：お前テスターがどうつて言つてたな」

「だ、だつたらなんや、文句でもあるんか！」

「文句つつうか、お前馬鹿か」

「何やと!?

「そもそもベータテストが1人も死んでないと思つていいのか?」

俺はアスナと出会う前にとある情報屋と会つた。そいつにベータテストの死者数を調べてもらつた。ベータテストを受けたのは1000人、その中で正式サービスに参加したのは恐らく700～800人、さらにその中で400人程がこの世界を去つている。現在死んでいったのは2000人そのうち新規プレイヤーの死亡率はおよそ17%、ベータテストの死亡率は50%とベータテストのほうが高い。知識と経験が必ずしも安全と言うわけでは無いことを示している。むしろ知識と経験があつた分慢心し、本サービスでの変更点に気付けなかつたのだろう。

「それにテスター無しでこのゲーム攻略出来るとでも思つてんのか? RPGといえば初見殺しなんて普通にあるだろう。まあ序盤じゃ少ないだろうが。それでも引っかかるやつは沢山いるだろうな、普通のRPGならミスつても次があるからな。だがこの世界は一度ミスつたら終わりなんだ、死んだやつから情報は得られない。だからテスター達が必要なんだ。それともなにか? テスター達から装備とコル奪つて戦えなくしておきながら情報も搾り取んのか? ゲームの中だから奴隸みたいに扱つても問題無いとでも言いたいのか? だとしたら自己中で最低最悪の屑野郎だな」

キバオウは顔を真つ赤にすると俺の胸倉を掴んできた。

「お前何様や！ テスターがわいらニュービーを放置したのは事実やろ！ テスターこそ自己中やないか！」

「…あの日、始まりの街でデスゲームになつた瞬間どう思つた」

「どうつてどうゆうことや」

「いきなりゲームオーバー＝現実の死だと言われたんだ。怖くは無かつたのか？」

「テスターだつて同じだ」

俺の言葉にキバオウは俺の胸倉を掴んでいた腕を放しあとさず。そして俺は追い討ちをかけるように言葉を続ける。

「それにお前の装備、結構いいやつだな。そこまで強化すんのに結構な時間が掛かつたんだろうな。でもお前のお仲間さんはお前ほど高くないな。自分がパーティのリーダーだから優先的に上げたのか。テスターにはコルよこせ装備よこせという割にニュービーの間でも格差があんのか。それともお前テスターか？」

「わいはニュービーや！」

「口で言うだけならなんとでもなる。ニュービーだと偽つてほかの奴らより強い事を見せつけグループ内で上位に立つ。ちょっと考えれば直ぐに思いつく。お前の装備がいいのはお前がテスターで効率良く強化できたからじゃないのか？」

俺の言葉にキバオウのパーティーメンバーはキバオウから数歩距離を置き始めた。

「ちょ、ちょいまちや！ わいはニュービーや！ あいつに騙されんな！」

キバオウは距離を置かれたことがショックだったのか顔を青くし弁明していた。人間はいつも残酷だ。口では仲間だと言つてもなにかあればすぐに裏切る。こいつらもあいつらと一緒だ。

「ニュービーと証明することはできな『発言いいかな？』

キバオウを最後の追い討ちをかけようとすると聞き慣れた声に被せられた。

「俺達はみんな、このデスゲームに捕らえられた仲間だろ？ ニュービーもテスターも境遇は一緒だ。こんなことで争い合うなんて馬鹿げてる。みんな仲良くするべきだ」

そう言つてこちらに近づいてきた。ディアベルと同じく誰もがイケメンだと認める顔立ちに金髪が目立つの少年。まさかこいつもこの世界に来ていたとはな。

「君は誰だい？ さつきも言つたんだけど発言する際は名乗つてもらえないかな？」

金髪の少年は表面上は申し訳なさそうにしていた。

「すみませんでした。俺はハヤト。俺はみんなでこのゲームを攻略したい」

# 邂逅と思惑

葉山もといハヤトが出てきてから一旦その場は収まり、ディアベルの指示の元、レイド結成やパーテイーごとの立ち回りなどボス戦に向けての作戦会議が始まつた。ディアベルに俺達のパーテイーのステータスを提出したとき、俺の顔を三度見したのは笑えたな。あんなアホ顔はなかなか見れないだろう。すぐに表情を戻し、しばし考え込んだあと良い笑顔で俺達に言つた。

「E隊は取り巻きコボルトを頼めるかな？」

「…ああ、まかせろ。重要な役目だな」

「ありがとう。それじゃよろしく！」

ディアベルは軽く手を上げ他の隊の方へ行つた。そこでアスナが口を開く。

「何が重要な役目よ、これじや一回もボスと戦えないじやない」

「しようがないだろ、メンバーが少ないんだ」

「それは理解してるわ。3人じやポツトローテするには少なすぎるものね。ただ納得できなだけ」

アスナも随分詳しく述べたものだ。教えたことはすぐに覚えるしそれの重要性やそ

これから繋がることも気付いて自分の物にしていった。

「なによその目は、わたしがただの我が儘娘だとでも思つた?」  
「いや、いじけてる可愛い妹つて感じだな」

「か、かわっ!?」

「やつぱ今のはなし、忘れろ」

つい口が滑つてしまつた。俺の妹は小町だけだ。ああ小町、元氣にしてるだろうか。  
来年は受験だというのにいらぬ心配をかけてないといいんだが。

「ハチ兄、会議も終わつたし宿に帰ろうぜ。おれ腹減つたよ」

「そうだな。そういえばアスナはどこに止まつてるんだ?」

「宿なんて取つてないわ。ずっと迷宮区で寝起きしてたから」

「だつたら俺達が泊まつてる所に来るか?あと一週間契約は残つてるがキャンセルして  
3人でもう一回契約すれば大した金額にはならないしな」

「それは悪いわ。だからあなた達の近くの宿を探すわ」

「ハチ兄、早く帰ろうぜ、腹減つたし風呂にも入りた「お風呂ですつて!?」うおう!」

さつきとは打つて変わつてキリトに飛びかかるん勢いで詰め寄るアスナ。

「今お風呂つて言つたわよねお風呂つて!」

「あ、ああ。言つたけど」

「ハチ君さつきの話断つちやつたけどやつぱり受けてもいいかしら」「別に構わんが」

「やつた！ そうと決まれば早く帰りましよう！ さ、早く案内して！」  
目を輝かせウキウキとしているアスナを見るとやはり年頃の少女なんだと改めて思  
う。

「ハチ兄、女の子つて難しいな」

「そうだな」

キリトとアスナの豹変ぶりに驚いているとハヤトとハヤトの取り巻き達がこっちに  
近付いてきた。てかあいつらもやつてたんだな。

「やあヒキタニくん君もこのゲームをしていたんだね」

「俺からしたらお前がいることが不思議でならないな。国立はどうした、あれは冗談  
だつたのか？ それとこっちじやハチマンだ」

今思えばこんな奴らのために動いていた俺がバカみたいだ。あいつらがやると言つ  
ても俺はるべきじや無かつた。

「キリト、アスナ先帰つてていいぞ」

とりあえずキリトとアスナをこいつらと一緒にいさせるべきじやない。教育に悪い  
からな。

「ハチ兄、別に待つてるぜ？」

「いいから先に帰つてろ、アスナがウズウズしてんだろ」

「べつ、別にウズウズなんかしてないわ！」

はいはいと軽くあしらいふたりを先に帰す。

「息抜きのつもりだつたんだ、こんなことになるなんて思つてもいなかつたからね。それにしても君が誰かと一緒にいるなんて思つてもいなかつたよ」

「国体つてのはそんなんでいけんのか、わりと簡単なんだな、お前には関係ない」

「なにヒキオの分際でハヤトに文句言つてんの？」

「文句じやねえよ、思つた事言つただけだ。だからこつちじやハチマンだ」

「ヒキオはヒキオだし、意味わかんないんですけど」

「まあまあ2人とも落ち着いて」

「つべーわ、てかハチマンが普通に喋つてるの新鮮じやねー？」

「ぐ腐腐、こつちに来てもはや×はちが見られるなんて」

「うお、戸部もいたのか。海老名さんもいるし、リアルの知り合い率高すぎね？」

「せーんぱい！」

「どん！と背中に衝撃が来て背中に柔らかいふたつの何かが当たつた…つて何事!?」

「なんだ一色か。お前はこつちじやなんて言うんだ？」

「イロハですよ先輩！さあ愛を込めて言つてください！さあ！」

「あざとい離れる」

「ぶう、つれないですね私と先輩の仲なのに」

まあ今はこれくらいにしてあげますと言つて離れるイロハ。イロハまでいるなんてな。正直意外だ。イロハとは修学旅行のあとに生徒会選挙で知り合つた。なんでもクラスメイトに嵌められて立候補させられたらしく、それを取り消したいと奉仕部に依頼してきた。あいつらと疎遠になつていたので俺個人で依頼を受ける形となつた。結果からいえばイロハに生徒会長になるように仕向けた。最初は不信任で落選することを勧めたのだがカツコ悪いから嫌だと言われこちらの案にした。生徒会長になつた時のメリットをイロハに提示し、納得してもらつた。それ以来妙に懐いかれてしまつた。まるで捨て猫に餌をあげたら懐かれたように。

「何が私と先輩の仲だ、都合の良く俺をコキ使つてるだけだろ」

「ひどい言い方ですね。もしかしていつも手伝ってくれる優しい先輩アピールしますか確かにいつも手伝つて下さつて助かつてますけど心の準備とかその他もろもろがまだ出来てないので無理ですごめんなさい」

「…なんで俺振られてるの？」

ほんとこいつぶれないのな。まあいつものことだから慣れたけど。

「イロハもそれくらいにしなよ。ところでハチマンにちょっとあつちで話があるんだけ  
ど少しだけ時間いいかな?」

イロハとの会話が一段落ついたところでハヤトが話しかけてきた。まあ今日は宿に  
帰つてゆっくりするだけだから時間は問題無いんだが…

「ここじゃダメなのか?」

場所を変えるつてのがどうも引っかかる。ボス戦のことなら全員が聞いておいた方  
がいい。その他の情報交換だとしても場所を変える必要は無い。となると個人的な  
話つてことか。

「ああ…悪いけどここじゃ話せない」

随分と神妙な顔付きをして俺にだけ聞こえる声で言つた。

「…彼女達もこのゲームの中にいるんだ」

彼女達、おそらく奉仕部の2人の事を言つているのだろう。しかしながらハヤトが俺を  
2人との合わせようとしているのかが分からない。俺はあいつらと縁を切つたし、あい  
つらもあいつらで好き勝手やつてているのだ。今更話すことなど何一つ無い。

「そんなの俺には関係ない。俺はあいつらと縁を切つたんだ。そんな事なら俺は帰る  
ぞ」

「そこをなんとか頼むよ、彼女達は今不安定なんだ。なんとかして欲しい」

「それこそお前がやればいいだろ。お得意の『みんな仲良く』でなんとかすればいい」「…本当に縁を切つたのか？」

「こいつ面倒臭いな、こんな意味の無い会話さっさと切り上げるか。

「うつせーな、切つたって言つてんだろ。あいつらがどこで何をしようと知つたこつちやない。もう俺は帰るぞ」

ハヤトが後ろから何かを言つていたようだつたが無視して宿へと帰つた。

ハヤトと別れキリト達のいる宿へと帰つた。木造二階建てのこの宿は一階でミルクを飲み放題と言う特典付きだ。ミルクを一杯飲んでから二階へ上がり扉を開けると

仰向けに倒れるキリト

頬を膨らませブンブン怒つているアスナ  
床を転がり回り爆笑しているフードのプレイヤー  
：なにこのカオス

「あー可笑しい！キー坊もアーチyanも最高ダヨ！」

未だににやははと笑うフードのプレイヤーもとい情報屋アルゴに事情をきいたとこ

キー坊がアーチyanの裸を見て殴られた

つぺー！このラツキースケベが！

それはさておき  
閑話休題

「で？アルゴは何しにここへ来たんだ？」

「キー坊に用事があつたんだ、もう済んだがナ」

話によるとキリトの装備している片手剣、アニールブレードを買い取りたいやつがいるらしい。よりもよつてそいつは

「キバオウ：ねえ」

あのモヤつとボールヘアーがキリトの武器を欲しがる理由が分からぬ。アイツの装備はキリトのアニールブレードと比べれば多少見劣りするが結構レベルは高かつた。格上の装備が欲しいならまだしも対して遜色なく使い慣れていない装備を求める理由はなんだ？キリトの装備を買い取ることで生じるキバオウのメリットはなんだ？キリトとキバオウに接点は無いはず。だとするとキバオウではなく第三者の差金、自尊心の

高いキバオウを簡単に利用できる人物がいるとすれば……

「どうしたハツチー、どんどん目が腐つてゐるぞ」

「いや、何でもない」

これはあくまで推測に過ぎない、過ぎないが頭の片隅に置いておこう。キバオウを後ろから操つているプレイヤー、そいつの思惑、最悪のパターン。これだけは何としても防がなければいけない。

「キリト、いい加減起きろ邪魔だ」

とりあえず未だに寝てるキリトを起こすことから始めよう。

# ベータテスト

一晩明けて俺達はまたあの広場に集まつた。

「今日はついにボス戦だ！迷宮区に向かう前にボスについておさらいしておく！」  
デイアベルはポーチから一冊の本を取り出し話し出す。表紙にネズミのマークが  
入つたこの本は情報屋アルゴが編集して道具屋に置いている。しかも無料で。俺の時  
は500コルも出したのに…

「この本によれば第一層のボスの名前はイルファング・ザ・コボルトロード、そして取り  
巻きにルインコボルト・センチネルが3体。今回のボス戦の特徴は2つ。一つはボスの  
ゲージが1本減る事にセンチネルが3体ポップすること、もう一つはゲージが最後の1  
本がレッドゾーンになると武器をタルワールに変える」

俺達の役割はあいつらがゲージを1本削り切る前にセンチネルを倒しておくこと。  
いくら取り巻きといえど放置しておくとロードとの戦闘に支障が出る。そして1番注  
意しなければいけない事。

「そしてこの本の最後の1文『これはベータテスト時の情報であり、変更点がある可能性  
大』これは未確認情報だが心に留めて置くように」

そう、この情報が絶対ではないという事。実際今までたくさんの変更点が確認されている。ボス戦が変更されていないなんてありえない。

「ちょっと待つてや、ディアベルはん！」

ちつ、またこいつか。

「本当にその情報が合ってるかワイは信用できへん！」

キバオウ、こいつが何をしたいのかさっぱり分からない。

「そもそもアルゴっちゅうやつはベータテスターのはずや、そんなやつの情報に頼るの  
はワイには出来へん！」

今更こんなことをいうなんて、またボコボコ（舌戦的な意味で）してやろうか。

「お「待つてくれ！」

あ？

「キバオウさん、あなたの言い分は分かる。だけど今は『みんな仲良く』するべきだ。こ  
んなところで躓くわけにはいかないだろう？」

「ハヤトはん、そう言うてもな」

「僕達は確かに、右も左も分からぬ状況で死にかけた事もあった。けど戦える人が  
減ればそれは僕達の危険にも繋がる。だから僕達は協力し合わなければならぬんだ」  
「…分かった、ここは大人しく引き下がつたる」

ハヤト、この発言はどつち付かずの発言に見えて実際はニユービーに偏った発言だと気付いているのか？そんな事をしているといずれコウモリ野郎なんて呼ばれるぞ。「ハヤト君ありがとう、キバオウさんあなたの想いは分かつた。しかしこれのお陰で偵察戦をせずに済んだんだ。そしてバスを倒して一層の皆に希望を与えるきやいけないんだ」

デイアベルは全体を見渡し、満足げに語る。

「これからボスを攻略法しに行く。今日皆が集まってくれてスゲー嬉しい！だから1人も死んで欲しく無い！全員生きて攻略する！いくぞ！」

デイアベルの言葉を最後に俺達は迷宮区へと向かつた。

「ねえハチマンさん、他のゲームでもこんな感じだったの？」

「こんな感じって？」

「遠足みたいにみんなで話しながら歩いて行く感じ、なんかこれから戦いに行くって感じがしないわ」

「こうゆうのはキリトに聞いた方がいいな。キリト、どうなんだ？」

「んー、他のMMOはこうはいかないな、ほかのゲームでもボイスチャットを使えば会話は出来るけどだいたいは通常のチャットを使うから戦闘中なんかは会話する余裕なん

てないかな」

他愛ない会話をしながら迷宮区を進む。モンスターは戦闘の奴らが狩りまくつてゐるからほとんどポツプしない。

「俺もモンスター狩りたいなあ、ハチ兄行つてきていい?」

「だめだ、モヤつとボールがうるさいからな」

「モヤつとボールつて誰?」

「キバオウの事だ、あの頭そつくりだろ?」

「モヤつとボールがなんだか分からなーいわ」

「まじで?あの六角形クイズ番組知らなーいの?」

「?知らないわ」

「まあもう放送してないし、10年以上前の番組だし、しようがないと言えばしようがないか」

「…ハチ兄、そろそろだぜ」

キリトに声をかけられ先頭の方を見ると周囲の造りとは一線を画す威圧感のある巨大な扉が見えた。扉の前にまで来るとさらに大きく感じる。

ディアベルがトびらの前に立ち振り返る。

「みんな最後に一言だけ、勝どうぜ!」

士気が高まる一方、これから始まる惨劇をまだ誰も知らない。

全員が部屋に入ると壁に設置された松明が灯る。扉の奥はかなり広かつた。ざつと奥行100m、幅30mつてどこか。部屋の最奥には大きな玉座が鎮座している。ディアベルの指示の元編成が組まれ、崩さないように奥へと進んでいく。玉座との距離が50mを切ったところで変化が起きた。玉座にポリゴンが集まり形を形成していく。2mを軽く超える体躯に紅く輝く瞳、右手には体躯に見合う斧、左手にはバックラーを携え、腰にはタルワールと思しき物を差している。頭上にH Pバーが4段ありその上に『イルファング・ザ・コボルトロード』間違いなく第一層のフロアボスである。完全に形を形成するとロードは俺達の前まで跳躍し、威嚇するかの如く吠える。それと同時に取り巻きのルインコボルト・センチネルもポップする。

「戦闘開始！」

ディアベルの合図によりソードアート・オンライン、第一層のボス戦が開始された。

「ハチ兄、アスナ手順は迷宮区のコボルトと同じだけど」

「首を狙えばいいんでしょ？」

「その通り！」

キリトとアスナがセンチネル目掛けて駆け出した。二人とも簡単に言うけどよ、セン

チネル鎧着てんのよ？首ってどんだけ狭いと思つてんの？そう思つてるそばからキリトがセンチネルの攻撃をパリーしスイッチしてアスナが喉元目掛けて寸分の狂いなくリニアーを叩き込む。あれ？これ俺いらなく無い？

「ハチ兄（ハチマン君）スイッチ！」

されどセンチネルはボスの取り巻き、アスナの一撃がクリティカルでも削り切ることはできないようだ。ここは兄貴分として弟、妹分の為に頑張りますか。短剣を構えセンチネルへと走る。

「なあ、キリト」

「どうしたんだハチ兄？」

「ちよつと聞きたいんだけどよ」

センチネルにトドメにさし、余裕ができたところで戦闘が始まつてからずつと気になつていた事をキリトに聞いた。

「ロードが腰にさしているのは本当にタルワールか？」

センチネルのポップ数もポップスピードもロードの攻撃パターンも情報通り、あと変更できる点があるとすればボスの装備変更。  
「そんなのタルワールに決まつ！」

「キリトどうした?」

「あれ、タルワールじゃなくて野太刀だ!」

野太刀、つまり刀か。

「キリト、刀スキルってのはあんのか?」

「あるよ。でもあれはもつと上の層でてるはずなのに!」

「それが変更点か? キリト、アスナと2人でセンチネルは問題無いな?」

「大丈夫だけどハチ兄はどうするんだ?」

「ちょっとディアベルんとこ行つてくる」

キリトに告げて隠蔽スキルを発動させてその場を離れた。

「キリト君、ハチマンさんはどこに行つたの?」

「ディアベルのところに変更点を伝えに行つた。でもなんで隠蔽スキルを使つたんだ?

「それはキバオウさんのせいじゃない?」

「キバオウ?」

「ええ、だつてハチマンさんが普通に近付いてもキバオウさんあたりに追い返されそうだもの」

ディアベルは1番後で指揮を取っていた。俺はディアベルの背後に立つと隠蔽スキルを解除して話しかけた。

「おいディアベル」

「っ!?なんだ、ハチマン君か。センチネルはどうしたんだい?」

「2人に任せてきた。それより伝えたい事がある。ロードが腰に差しているのはタルワールじゃ無くて野太刀だ。一度撤退して作戦を立て直すべきだ」

「つ!?確かにあれはタルワールじゃない、でも、ここで引くわけにはいかないんだ!」

「お前は刀スキルを知ってるのか?」

「…知ってる。だから大丈夫だ」

「そうか、ほかの奴らにはちゃんと説明しろよ。俺はどうなつても知らんぞ」

「分かつてる!」

「おい、その腐り目!そこで何しどんのや!」

ディアベルと会話はしていたらキバオウに気付かれた。面倒臭いのが来たな。

「気付きたことを伝えに来ただけだ」

「ベータテスターとつるんでる奴のことなんか信じられるかいな!」

「べータテスター?誰の事だ」

「しらばつくれんな!あのキリトつちゅうガキや!」

：こいつはキリトがテスターであることを知っている。キリトがテスターだと知つて いるのは俺、アスナ、クライインという男。あとは

「キバオウ、お前テスターだな？」

「なつ！ワイはニュービーやつちゅうに！」

「テスターだと知るものは本人と本人に聞いたやつ、そしてテスターだ。キリトはプレイヤーネームを変えてない。俺はキリトとあの日からずっと一緒にいるキリトがお前に教えることはできない、つまりお前はテスターだ」

「違う！ワイは情報屋アルゴに大金積んで聞いたんや！」

「キリトただ1人の確証を得るためにか？随分とキリトを怪しんだな、会話のひとつもしていないので。それともお前は全テスターの名前を聞いたのか？それならまだ納得出来る。しかし400人近くのテスターの名前を聞くためにいくら積んだんだ？随分と金持ちなんだな」

それに

「アルゴは確かにテスターだがテスターがテスターを陥れて何の意味がある？アイテム狙いと言えば終わりだがアルゴは情報屋だ、テスターは貴重な情報源だから吊るし上げるようなことは絶対にしない」

キバオウはこちらを睨みつけて来るが反論はしない。否、できない、なぜなら

「キバオウ、さつさとお前の後ろにいる奴を吐け。さもないとお前をテスターとして吊るし上げてやる」

「ワ、ワイは…」

「そこまでしてくれるかなハチマンさん」  
ようやくお出ましか。

「やっぱりお前か、ディアベル」

# 最悪のパターン

「やつぱりお前か、ディアベル」

「何のことかな？俺はそろそろ戦線に復帰して欲しいって言いたいだけなんだけど？」  
「…そうゆうことにしておく」

「何食わぬ顔で言いやがつて…少しば動搖しろよな。

「ディアベルはん」

「キバオウさんも早く隊に戻ってくれ。そろそろ終盤だ」

「分かりました」

ディアベルには大人しく従うんだな。やはりキバオウの後ろにいるのはディアベルか。頭の中で情報を整理し仮定をひとつひとつ証明していくキリト達の元へ帰る。  
「ハチ兄、どうなつた？」

「問題無いそうだ」

「…てことはディアベルはテスターなのか？」

「だろうな。この後どうするかは知らんがな」

「ちょっと待つて。ディアベルさんニュービーって言つてたわよね。ニュービーだと偽

「理由は何?」

「さてな。ただ俺の考える最悪のパターンにならなきやいいが」「最悪のパターン?」

「ゲージがレッドゾーンに入つたところでデイアベルがLA狙いで単騎突撃、情報と違うスキルで混乱し死亡、指揮官を失つたことでレイドの崩壊、そして壊滅だ」  
「それだけはなんとしても防がなければいけないがデイアベルは大丈夫だと言つた。  
だが信用はできない。

「キリト、カタナスキル分かるつて言つたな」

「分かるけど?」

「デイアベルが死んだらお前が指揮を取れ」

「ええ!? 無理だよそんなの!」

「スキルの範囲と捌き方を言えばいいあとは俺達で削り切る」

「俺達つて3人で!!」

「最悪な。まあ俺達が時間稼げば何人か参加してくんだろう」

「うわ適当」

喋りながらも最後のセンチネルを倒す。するとボスに変化があつた。最後の1本がレッドゾーンに入ったようだ。斧とバツクラーを投げ捨て腰に差した野太刀を振り抜

いた。

「やっぱり野太刀か：ってやばい！」

「どうした！」

「ソイツを囮んじゃいけない！回避か防御を！」

キリトの叫びはロードの雄叫びとソードスキルのサウンドエフェクトにかき消された。

『旋車』。刀を水平にし、回転して周囲を薙ぎ払うスキル。ロードを囮んでいた奴等は吹き飛ばされスタンしていた。つち、スタンすんのは厄介だな。てかこのままじやあいつら死ぬなどうする：思案している間にもロードは立て続けにスキルを発動すしようとしている。

「クソ！」

「おい待てキリト！」

俺の制止を振り切り、キリトはロードを止めに行つた。あのバカ、このタイミングじゃお前が！

「アスナ！キリトンどこ行くぞ！」

「了解！」

キリトが死ぬのは困んだよ！

カタナスキルについてはある程度知っていた。だから彼には大丈夫だといった。でもまさか条件反射でスキルを使うとは思わなかつた。囮んでいた4つのパーティーが吹き飛ばされスタンしている。他のパーティーも情報と違うスキルに呆然としていた。これは俺の責任だ。俺が止めなければいけないことだ。それにより死んでしまつたとしても。

今、何が起こつた？ 何で俺は倒れている？ 辺りを見渡すと後方にいたイロハ以外の3人も倒れている。：：： そうだ、ロードが情報とは違うスキルを発動してモロに食らつたんだ。あ、ロードがスキルを発動させようとしている。どうする？ このままじや誰か死んでしまう。もしかしたら俺かもしれない。嫌だ、死にたくない！ 誰か、誰かいないのか、この状況を打破できるやつは！ 思考してる間にもロードのスキルが発動しそうだ。死の間際に立たされたことで思考が加速しているのか周りの動きがスローに見える、しかし体は動かない。なんだこの地獄は、死の瞬間まで分かつてしまうじゃないか。頼むから俺達のパーティーにスキルが来ませんように……

俺達の後ろから誰かが出てきた。ディアベルさん？ 待つてくれ、危険だ！ クソ！ まだ体は動かないのか、いや動く？ 動こうとしないのか？ 何でだ！ 何でこんな状況なのに動

こうとしないんだ！クソ動けよ！うゞ）…

「動けよ！」

良し動いた！まずはデイアベルさんの援護を  
「うわああああああああああ！」

え？

目の前ではデイアベルさんがロードのスキルを食らつて打ち上げられていた。そして追い討ちをかけるようにロードが飛び上がりスキルを発動した。三連撃がデイアベルさんにヒットし、吹き飛ぶ。吹き飛んだ先で知った顔がポーションを取り出していた。しかし数秒後デイアベルさんはポリゴンとなつた。死んだ？この世界での死はこんなにも呆気ないものなのか？また思考の渦に飲まれる中ロードの存在を忘れていた。しかし攻撃されていない、何故か。ロードは黒髪の少年と栗色の少女に抑えられて、いや押されていた。俺は何をしているんだ？立ち上がつただけで、デイアベルさんを見ていただけで、自分よりも年下であろう2人の少年少女が鬭つているのを見ているだけ？ダメだ、もう間違う訳にはいかないんだ！ポーションを飲みながら、アニールブレード+4を握りしめ前線に走つた。

キリトがいち早く行動したがデイアベルが打ち上げられ追い討ちを食らつて吹っ飛

んでしまった。

「キリト！ アスナ！ 一緒にボスを抑えろ！」

「クツ、分かつた！」

「了解！ ハチマンさんは？」

「あのバカのところに行つてくる」

アスナ達と別れディアベルの元へ急ぐ。ポーチからポーションを取り出し、すぐに使えるようにしておく。

「ディアベル飲め！」

ディアベルの元に着いてすぐ口にポーションを突っ込もうとしたがディアベルに止められた。

「ハチマンさん、すみませんでした」

「謝るな早く飲め！」

「リンドとキバオウさんにありがとう、と、そしてハチマンさん、ボスをたお」

言い切る前にディアベルはポリゴンへと還った。周囲から悲鳴の様なものが聞こえたがそんなのを気にしてはいられなかった。ディアベル、お前は良くやつた。ここまであいつらをまとめ上げたのは確かな功績だ。後任出来るやつも一抹の不安はあるがいる。あとはお前の望みを叶えよう。

「ボスを…倒す！」

ロードへと向かい走る。向かう途中で誰かが並走していた。

「お前じや足でまといだハヤト」

「このままじゃ、終われないんだよ！」

ハヤトは涙を流しながら走っていた。デイアベルが死んだ事が悲しいのか、それとも別の何かかは知らんが

「やるからには死ぬな」

「分かつてる！」

全く、こいつと肩を並べる時が来るなんてな。

「らア！ アスナ！」

「はあああああ！」

ハチ兄に指示されアスナとロードを抑えていた。一つのミスが最悪死を招くギリギリの中で悲鳴が聞こえた。恐らくデイアベルは……そんな事を考えていたからだろうか。

「!? しまつ！」

「キリト君！」

パリーに失敗し、攻撃を食らい、それと同時にアスナも巻き込んでしまい二人とも5m程吹き飛んでしまった。そんなスキをロードが見逃す訳もなく、先程デイアベルを屠った『紺扇』を繰り出そうとしていた。ごめんハチ兄、ここまでみたいだ。死を覚悟した時、風が吹いた。風は光を纏つてロードを吹き飛ばした。

「キリト、アスナ良くやつたな」

俺とアスナのあたまをくしやくしゃと撫でロードから立ち塞がるように立つ2人のプレイヤーがいた。

「少し休んでろ、ここからは俺達がやる」

ハチ兄と金髪のプレイヤーはロードへと走つていった。

「まずい！」

きりととアスナが吹き飛ばされロードが追い打ちを掛けようとしていた。

「ハヤト、突進系のスキルは使えるか？」

「使えるよ！」

「なら合わせろ、ロードを吹き飛ばす！」

俺は『ラピット・パイト』を、ハヤトは『ソニックリープ』を発動しロードの腹へ向けて放つた。スキル発動の瞬間だった為かロードは回避する事が出来ず吹き飛ばす事

に成功した。キリトとアスナのHPを確認するとアスナはギリギリグリーン、キリトはイエローまで下がっていた。よく2人でここまで持ちこたえたものだ。

「キリト、アスナ良くやつたな」

2人の頭をくしやくしやと撫でロードへと向き直る。

「少し休んでろ、ここからは俺達がやる」

このクソロードに後悔させてやる。

「ハチ兄、ディアベルは」

「話はあとだ。キリト、ハヤト…こいつにロードが繰り出すスキルの指示を出してくれ。ハヤトはスキルを回避しつつダメージを与える。確かにスキが出来ない限りスキルは使うな」

「君はどうするんだい？」

「奴のスキルを無効化する」

「ハチ兄！ いくら何でも初見や1回見ただけのスキルを無効化なんて無茶だ！」

「…キリト、いきなり攻撃されたらびっくりするよな」

「何を言つて」

「つーわけでハヤトへの指示頼んだぞ」

隠蔽スキル発動、ステルスピッキー発動。

「…俺は影だ」

気持ちちは某籠球漫画の主人公。  
俺はボス部屋から姿を消した。

## 嫌われ者

ハチ兄が目の前から消えた。見失うならまだ分かる。消えたのだ。忽然と、唐突に、幻だつたかのように、ハチ兄は姿を消した。

「は、ハチマンさんが消えた!?」

「……これってあの時の」

「2人とも驚いてる場合じやない！」

ハヤトさんの声で我に帰る。吹っ飛んでいたロードがスキルモーションに入つていた。

「あれは『浮舟』！下から切り上げて浮かせるスキルです！左右に避けてください！受けたら対処が難しいです！」

「分かった！」

ハヤトさんは素早く右へ回り込んで回避する。上手い、一度見たとはいえすぐに実行出来るなんて。

「はあああああー！」

ハヤトさんはロードの懷へ潜り込み何度も斬り付ける。ロードは怯むことはなく再

度スキルモーションに入る。

「それは『幻月』です！ ランダムで上段切りか下段切りが来ます！ 同じく左右にか」

しかし助言が遅かつた。これではハヤトが行動する前にスキルが発動してしまう。俺がクイックリープを使えばまだ間に合うか？ そう思つた時、なんとハヤトは回避行動を取ることはせずロードに斬りかかつた。ハヤトが『幻月』を食らい吹き飛ばされるビジョンが浮かんだ。しかしハヤトさんは笑つていた。

「こつちだテカ物」

突如ハチ兄が現れロードの顔面に『クロス・エッジ』を放つた。突然の登場と顔面にスキルを食らつたことで『幻月』はキャンセルされスキができる。そこを見逃さずハヤトさんは『ホリゾンタル』を発動する。まるで分かつてた見たいだ。ハチ兄とハヤトさんのコンビネーションに呆然とする。そしてまたハチ兄は姿を消した。ロードはハヤトさんしか見えていないように見える。スキルをキャンセルさせられたのが苛立つたのかロードは先程デイアベルを死に追いやつた『緋扇』を発動させようとし、跳躍した。否、跳躍したかのように見えた。

「それはさつき見た」

ロードが跳躍した瞬間、ロードの頭上にはハチ兄がいた。『ラピット・パイト』を脳天に叩き込んだ。システムアシストだけでなく重力加速度を味方に付けた『ラピット・パ

イト》はアスナの《リニア》に匹敵するスピードで放たれた。そしてロードの跳躍に合わせたことで威力はさらに上がる。

ここでソードアート・オンラインのプレイヤー及びモンスターの構造について説明したい。ソードアート・オンラインは『ソードアート』とあるようにソードスキルが売りのゲームだがそれ以外にも凝っている事がある。それのひとつがプレイヤー及びモンスターの構造だ。モンスターにはウイークポイント、つまり弱点が設定されている。プレイヤーも首や頭、心臓といった重要器官は大ダメージを受ける。そして体の器官も現実そつくりに設定されている。水中にいれば酸欠で目を潰されれば視界が減少する。今回の場合、頭、つまり脳に大きな衝撃を与えたたらどうなるか。

〔転倒タンブル、しかも混乱びよつてる！アスナ一気に行くぞ！来れる奴らも来い！〕

俺の呼び掛けに応えほぼ全員がロードに向かつてスキルを発動する。40以上のライトエフェクトが輝きロードへと殺到する。ここで決めなければ技後硬直の間に《旋車》が俺達を斬り殺すだろう。ライトエフェクトが止んだ時俺達は絶望した。ロードのHPは一ドットだけ残っていた。一ドット、何でこれを押しきれなかつたのか。ロードはニヤリと顔を歪め《旋車》のモーションをとつた。

「…たく、往生際が悪いんだよ」

誰もが動けない中、誰もが絶望した中で、聞き慣れた声が響く。

「じゃあなロード、強かつたぜ」

唯一動けたハチ兄がロードのHPを削り切る。ロードは数歩後ろによろめき、天井を見上げ吼える。直後、ロードに無数の鱗が入り爆散する。

『…………しゃあああああああああああああああああああ!!』

一瞬の静寂を壊すように歎声が上がる。俺達はソードアート・オンライン第一層を攻略した。

「ハチ兄！ 最後何で動けたんだ？」

「ん」

ハチ兄は短剣を持ち上げる。……そ、うか、短剣は威力が低めだが連撃に向いていて、技後硬直が他の武器より短い。だから動けたんだ。

「ハチマン、流石だね」

「お前に褒められても嬉しくねーよ」

リア充に褒められても嬉しくねーぜ、そんな事してつから…

「ぐ腐腐、やはりハヤ×ハチはサイコーだああああああああああ！」

「擬態しろしつ！」

ほら、うるさいのが出てきた。

「ハヤトくんもハチマンもマジっベーわ」

「せーんぱーい！めちゃめちゃカツコよかつたですう！」

「そういえばこいつら存在感無かつたな。…ブームランな気がするぜ。」

「なんでやー！」

歓喜が包む部屋に悲痛の叫びが木霊した。

「何でデイアベルはんを見殺しにしたんやー！」

「見殺し、何のことだ？」

「そこの黒髪のチビはボスの使うスキル知つとたやないか！それをデイアベルはんに伝えていたらデイアベルはんは死なずにすんだんやー！」

歓喜は次第に疑惑、そして不審へと変わつていつた。…まずい。このままだとスターとニユービーとの確執が生まれてしまう。どうする、どうやすればこの状況を打破できる…：

「待つてくれみんな！彼がテスターだったとして、みんなを助けたのは事実だ！責められる謂れはないはずだー！」

「それでデイアベルさんは死んだんだぞ！アイツの肩を持つってことはお前もテスターだな！」

「ち、違う！俺はテスターじゃない！」

キバオウ以外のやつもしゃしゃり出てきて、ハヤトの説得は被害を大きくするだけだつた。あれじやデイアベルの死はしようがなかつたと言つてる様なものだ。ふとキリトに目をやると何か決意したように見えた。そしてキリトが何をしようとしているのか理解した。それはまだ中学生であろうキリトには重過ぎるものだ。それだけは…それだけはやらせてはいけない。そうゆう汚れ役は、弟の後始末は兄が片付けるものだ。キリトが何かする前に行動に移つた。

「キバオウ、そしてリンドってのは誰だ？」

「リンドは俺だが、なんだ」

「お前らに死に間際のデイアベルから言伝がある」

「俺の言葉に静まりかえる。うへえ、ボツチが注目されると死んじやうよお…」

「ありがとう…だつてよ。俺にこの言葉の真意は分かりかねるが、確かに伝えたぜ」  
涙ぐむ2人はどうでもいいが、さつさと本題を済ませるか…

「それとキバオウ、お前に言いたい事がある」

「…何や」

「デイアベルが死んだのはアイツが馬鹿だつたからだ」

「何やと！」

「俺とデイアベルが話しているのをお前は見たよな？俺はあの時、ロードが腰に差して

いるのはタルワールじゃなく野太刀だと伝えた。そしてカタナスキルを対処できるのかと聞いた時、ディアベルは大丈夫だと言つたんだ。それなのにアイツはろくに指示を出さずレイドを崩壊させた。挙句単騎特攻して返り討ち、これを馬鹿と言わずになんて言うんだ」

「ディアベルはんはニュービーだつたんや！ カタナスキルなんて分かるわけないやろ！」

「じゃあなんでディアベルは俺に大丈夫だと言つた？ 俺を心配させない為か？ 他の誰かが死んでいたらどうするんだ」

「知らんわそんなん！」

「思考を放棄したな、そんなんで良く人を疑えるな。いいか、ディアベルはテスターだ、カタナスキルを知つていたがその知識はロードに対応できる程では無かつた。だから死んだんだ。もつとも偵察戦をしていれば死ななかつたかもしぬないが、いまさらか」

俺の言つたことは全て事実で、こいつらにとつては認めたく無いもの。憧れの人が今まで蔑んできたテスターだつたのだ。

「…さつきからお前何なんや！ ディアベルはんをボロカスいいよつて！ ディアベルはんはベータテスターだつたかもしぬへん。だけどディアベルはんはワイらの為にやつてくれたんや！」

「さつきからデイアベル、デイアベルつてうるせえよ。いつまで死んだ人間のこと言つてんだ」

空気が凍りついた。ピシッ、と擬音が聞こえたような気がしたが構わず続けた。「デイアベルに頼りきりだつたお前らがこれからどうするかは知らんがせいぜい死なないようにするんだな」

それを最後に第二層へ続く螺旋階段へと向かう。その途中でキリトとアスナ、ハヤトとすれ違つた。キリトとアスナは悲しそうな、ハヤトは悔しそうな顔をしていた。螺旋階段を登つて行く途中キリトとアスナ、そしてハヤトが追いかけるように登つてきた。

「ハチ兄！俺：俺は！」

「キリト、お前はこれから攻略に必要不可欠だ、強くなれ。お前が負い目を感じる必要は無い」

「ハチマンさん」

「アスナ、お前はいずれキリトと同じく強くなれる。それとキリトをよろしく頼む、こいつはまだ中学生だ」

キリトとアスナに一言言つたあと、ハヤトに胸倉を掴まれる。

「ハチマン、お前はどうしてそんな風にしかできないんだ…」

「これが1番効率がいいからな」

「だからなんで！」

「それ以外言うな。これは俺が選んだ道だ」

「俺を掴んでいた腕は力無く落ちる。

「じゃあな、どつかで会つたらよろしく」

第二層への扉を開き、新たな大地を踏みしめる。

## 休日

デスゲームが始まつてからおよそ半年が過ぎた。あれからこの世界の内情は大きく変わつた。

一つ目は大型ギルドの設立。代表格として血盟騎士団、アインクラッド解放軍、聖龍連合の3つがある。そしてアインクラッド解放軍と聖龍連合のトップはキバオウとリンドがなつた。血盟騎士団は第五層の時に結成されたギルドだ。団長はヒースクリフというおっさんだつた。そして副団長はなんとあのアスナだつた。キリトは相変わらずソロをやつてゐるらしい。：人のことは言えないが。あとハヤトたちは血盟騎士団に入つた。カケルは自分の成長に限界を感じたらしく鍛冶職に転職した。イロハは実力を買われなんとアスナ直属の部下となつた。ハヤトとユーミン、ヒナはただの下つ端らしい（ハヤトは一層であんなに活躍したのに：：南無）。

二つ目はプレイヤー間の格差。高レベルのプレイヤーはトッププレイヤー、攻略組と呼ばれ最前線で戦つてゐる。しかしそこへ至る途中で挫折し戦線から退いたプレイヤーが数多くいる。生活できるだけのコルを稼ぎ普通に暮らしてゐる者や生産職に転向してプレイヤーを支えている者など様々だ。

三つ目は死者数。第一層でデイアベルが死んでからボス戦での死者は出でていない。しかし、ボス戦で死者は出でないが死者は一向に減らない。ファイルドでモンスターに殺られるのが9割、そして残りの1割はPK、プレイヤーキル、つまり殺人だ。第二層のあたりからその影は存在した。しかし最近はその影が濃くなつてきている。  
それはともかく

### 閑話休題

俺は現在第二十五層の主街区『オワゾー』の宿で惰眠を貪つてゐる。昨日は、レベリングを丸1日してゐたので今日は休日だ。しかし、さつきから5分置き位でメッセージが届き俺の惰眠を邪魔してくるのだ。意地でも見ないと心に決め寝ようと試みるが徐々に間隔は短くなり、挙句着信音がなり続ける事になつてしまつた。

「あーうるせえ！誰だよ！」

苛立ちと共に起き上がり、メッセージの差出人も内容も確認せずに『うるせえ！』と返信する。すると着信音はピタリと止み、今度こそ安心して惰眠を貪ろうとベッドへ入つた。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
 ノドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
 ノドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド  
 ノドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

「一ノ山」

返信して1分足らずで勢いよくドアを叩かれ驚きベッドから飛び起きた。

ハチくーん？いるんでしょー？でできなさーい。

セイヒツ

コワイコワイコワイコワイコワイ！この声はアスナとイロハだよな？なんで俺がここに泊まってるって知ってるの？

イロハちゃんホントにここにハチくんがいるの？

まちがいないです！カケルさんにおしえてもらいましたから！

ヤバイ、これ開けたら俺死んじやうんじやないかしら？でもここで開けなかつたら次あつた時がもつと怖いし…

ふくだんちよう、いまはあきらめましょか？

そうね、1じかんごにまたきましょう。

すると扉の前から2人の気配が消えた。：今之内に場所帰るか。装備を整え外の気配に注意しながら慎重に扉を開ける。

ガツ！

手の平1枚分開けた瞬間、隙間から手が入り込み扉が勢い良く開けられた。

「やつぱりいたわねハチくん」

「こんなに可愛い2人を待たせるなんて最低ですよ？」

ニコニコして立っているアスナとイロハ。ああ、さよなら俺の休日。

「で、何の用だ？」

「何の用つて攻略をサボつてるハチくんを連れ出しに来たんだよ」

「せんばいは誰かが見てないとすぐ急げちゃいますからね」

なんて言われようだ。ここは年上としてガツンと言つてやらねば！

「俺は昨日一日中迷宮区にいたんだ。サボつてるだの急げてるなんて言われるなんて心外だ」

「キリトくんは今日で3日目だよ？」

「ハヤトさんは2日目ですね」

ハヤトはともかく年下のキリトが3日目と言われたらぐうの音も出ない。あの  
戦闘狂め、今度会つたらただじやおかない！

「はあ、分かつたよ。行けばいいんだろ行けば」

「隠蔽スキルでやり過ごすだけはダメだよ？」

「ちゃんと倒してコル稼いで奢つて下さい！」

なんでこいつらはこんなに俺に固執するんだか：訳が分からぬよ（奇跡を起こす白

い動物風）

「馬鹿なこと考えてないでパーティー組んで」

「さつきの顔ちょっとキモいですよ？せんぱい」

俺は泣いてもいいんじゃないだろうか？

第二十五層は鳥型モンスターのが多い。50cm程の小型から翼長1.5mもある大型、翼や首が複数あつたり、火を吹くやつもいれば鳥人のようなやつもいる。何より面倒臭いのが飛ぶことだ。鳥なのだから飛ぶのは当たり前なのだが、高く飛ばれると投擲しないと攻撃が当たらない為倒すのが非常に面倒臭い。

「あ、こらー！逃げるな降りてこーい！」

あと一撃で倒せるのに上へ逃げられたイロハ。イロハの装備は俺と同じく短剣でもともとの射程がかなり短いので攻めあぐねていた。

「せんぱーい！ アイツまた逃げました！」

「逃げられる方が悪い。アスナを見る」

アスナの方を見ると逃げようとする複翼のモンスターに逃げられるより早く細剣を突き刺しポリゴンへと還す。

「あれは剣速がおかしいんですよ！ レベルは同じはずなのに！」

「ほう、イロハはアスナのレベルに追いついたのか。なかなか頑張つてるな。  
「ハチくんにイロハちゃん喋つてないでちゃんと…ハチくん後ろ！」

へいへい、言われなくとも分かつてますよ。後ろから嘴で貫こうとしているモンスターの攻撃を避け、すれ違際に翼を切り落とした。

「無様だな鳥公」

怯えたような表情のモンスターにスキルを叩き込みポリゴンへと還す。ふう、疲れた。短剣を鞘にしまうとアスナとイロハがジト目でこちらを見ていた。

「…なんだよ」

「なんでそんなに綺麗に翼を切り落とせるんですか？」

「付け根を狙えば落ちるぞ」

「そんなのできるのハチくんとキリトくんくらいだよ…」

「ハヤトも確かやつてたぞ」

「それはマグレです」

「…さいですか」

2人のハヤトの扱いに不憫に思いつつも迷宮区を進んでいく。

「そういえばせんぱいは今レベルいくつなんですか？」

「あ、それ私も気になる」

「ステータスの詮索はマナー違反だぞ」

「私は34よ」

「私もでーす。さあ私たちは公開しましたよ?」

先に自分達のレベルを教えるすることでこちらの逃げ道を塞ぎに来るとはな。さすが血盟騎士団副団長とその直属、やり方が汚い。しかしがレベルを知つてしまつたからにはこちらも教えるのが普通か。

「どうか、頑張つてるな」

「ありがとうございます。それでせんぱいのレベルはいくつなんですか?」

「アスナも頑張つてるな。その調子で頑張れよ」

「ありがとうございます。でハチくんのレベルは?」

「よし、さつさと先進もうぜ」

「「ハチくん（せんぱい）レベルは？」」

「…お、ポップしたな。1番デカイやつ俺やつからあとよろしく」

「「ハチくん（せんぱい）！」」

俺は普通に分類されないからな。今日は休日だつたのに何やつてんだろ…：

# 秘密

「せーんぱーい、教えて下さいよお」

「断る」

「私たちが言つたんだからハチくんも言うのが普通じやない？」

「生憎俺は普通じやないからな」

イロハちゃんと一緒にハチくんを<sup>お願い</sup>脅して部屋から連れ出して迷宮区に来た。ハチくんが昨日一日中迷宮区でレベリングしていたのはイロハちゃんがカケルくんから聞いたのを聞いた、今日お休みする事も。今日なら確実にハチくんに会えると思つたのだ。もともとは1人で来る予定だつたんだけどギルドを出る時にイロハちゃんとばつたり会つた、会つてしまつた。

『せんぱいのところ行くんですね、私も行きます！抜け駆けは無しですよ？』

『なんで分かつたんだろ？迷宮区に行くとしか言つてないのに…』

『それにしてもなんでせんぱいのアレ使えなくなつたんでしょうね？』

「…俺が知りてえよ」

「わたしとしてはハチくんが普通のプレイヤーに近付いて安心したけど」

「オレが普通じやないみたいな言い方はやめろ」

「いやいやいや、せんぱいのアレは異常でしたよ？ 異常どころか異端：いや異形？」

「それ目だよね？ 何俺の目そんなにヤバイの？」

「今だつてキリトくんと並んで他のプレイヤーより飛び抜けてるからね」

「…解せぬ」

ハチくんのするすひつきー？とかつて特技が第五層を攻略してから使えなくなつたらしい。どんなに頑張つてもキリトくんの索敵スキルに看破されるらしい。それでも並のプレイヤーには見つからないのだけど。

「どうせボス戦の時にレベルは開示するんだからいいだろ」

「それとこれとは話が別なんです！」

「意味が分からん」

「別にレベル位いいじやない。スキル詮索してる訳でもないし」

「黙秘權を行使する」

「もしかして言えないほどレベル高いんですか？」

「…そんなわけ無いだろお前らと同じくらいだ」

「明確な数字で教えて下さい、さもないと」

「…さもないと？」

「せんぱいに倫理コード無理矢理解除させられて乱暴されたった言いふらします」

「ごめんなさいそれだけはやめてください」

イロハちゃんの脅しにハチくんは流れるよう土下座した。あまりの滑らかさに  
ちよつと引いてしまった。

「それで、レベルはいくつなんですか」

「…41だ」

「よんじゅういちいいいいいいいい！」

「えっと…ハチくんそれホント？」

正直信じられない。いくらソロで経験値配分が無いとはいえ、もともとレベルが高め  
だつたとはいえ、同じく最前線で戦っている私たちよりも上だなんて。

「せんぱいバカなんですか!? どんだけ無茶なレベリングしたんですか!?」

「別に無茶なんかしてねえ」

「いやいやいや、階層+10が基本なのにそれにプラス6とかおかしいですよ？」

「…いい感じにモンスターがポップしたんだ」

「それは言い訳としては苦しいんじやないかな？」

「…頑張ったんだ」

「もはや苦しいなんてレベルじゃないです」

「…いつの間にか上がつてた」

怪しい。目をそらすところがさらに怪しい。ハチくんのことだからキリトくんみたいに日夜問わずレベリングするなんてことしないだろうし。でもそうでもしないところにレベルは上がらないだろうし。他に何か原因があるはず。

「ねえハチくん、この迷宮区で何があつたの？」

私の言葉にハチくんはビクッと反応した。やつぱり何かあつたんだ。

「…教えることはできない」

「どうして？ そんなにレベルアップするならみんなでその情報を共有して全体の底上げをしないと」

「デュエルで俺に100連勝できたら教えてやる」

「そんなの無理に決まってるじゃないですか！」

「だつたら諦めろ」

ハチくんに100連勝するなんて絶対に無理だ。今までやつたデュエルも黒星のほうが圧倒的に多い。白星と言つても初撃決着モードでハチくんの意表を突いた奇襲でなんとか勝つただけだし。

「そんなこと言わずにい教えて下さいよおせえんぱあい」

「イイイイロハちゃん！ 何してるの！？」

「うお！は、離れろ！」

頑なに言おうとしないハチくんの腕にイロハちゃんが抱き着いた。にやにや顔のイロハちゃんに顔を赤くするハチくん。「一人とも軽装だからいろいろ感じるのだろう。

「こんなに可愛い後輩が頼んでるのにダメなんですかあ？」

「だ、駄目だ！」

「…教えてくれないとさつき言つたこと、ホントにしちゃいますよ？」

「なつ！ぐぬぬ…それでも、駄目だ！」

「ぶう、ずるいですよ。せんぱいばかりレベル上がつて」

「イロハちゃんそろそろ離れて！ハチくんもデレデレしない！」

「デレデレなんてしてねーわ」

「あれれえ？副団長どうしたんですかあ？嫉妬ですかあ？」

「そ、そんなんじやないわよ！いいから早く離れてー！」

イロハちゃんがハチくんに抱き着いているのを見るとモヤモヤする。嫉妬…じゃあ

ないと思うけど、とりあえずは。

「早くは・な・れ・な・さ・い！」

デレデレしているハチくんにお説教しないと。

「いい？ハチくん付き合つてる訳でもない女の子とベタベタしちゃいけないんだよ？」

「もう1時間だぜ？分かつたから正座解いていい？」

「もう、ホントに反省してるの？」

「したつて、だから正座解いていい？」

「そもそもハチくんは年下に弱すぎるのよ。この前だって始まりの街で中学生くらいの子と一緒にいたわよね？人によつては犯罪だよ」

「ねえ話聞いてる？…てかなんでそんなこと知つてんだよ。イロハ、この子怖いよ」「私も知つてますよ？」

「やだこの子達ストー」「話をそらさないで」…はい

もう、ハチくんつてばすぐに話をそらして逃げようとするんだから。

「とりあえず今日はこのくらいで許してあげます。今後こんなことはないよう！」

「そもそも無実なん「ん？」…すみませんでした」

「せんぱいってば副団長の尻に敷かれてますねー。辛くなつたらいつでも私のところに

来てもいいんですよ？」

「…もつと辛くなりそうだな」

「それどーゆー意味ですか!?」

「ハチくんそれ私も聞きたい」

もう1時間お説教が必要かな?

今度こそ閑話休題  
ガミガミガミガミガミ

「それにしてもこの層変じやないですか?」

アスナのお説教をなんとか耐え抜き、引き続き迷宮区を進んでいるとイロハが不意に話しう出した。

「何が変なんだ?」

「今までの層は攻略まで大体1週間くらいだつたじやないですか。でもこの層はもう5日なのにボス部屋も見つけられないなんて」

確かに今までの層より攻略のスピードが落ちているのは感じていた。そもそもモブが強めだ。二十四層と比較しても一層差とは思えない程の強さで苦戦を強いられている。

「まあ、そのうち見つかんだろ。知らんけど」

「知らんけどって、ハチくんも真面目に攻略してよ」

「そうですよ、だいたいせんぱいはいつも情報集まつてから出てくるんですからたまには情報収集して下さい！」

「気が向いたらな…お、安全地帯だな。少し休んでいこうぜ」

迷宮区の中には存在するモンスターがポップせず、侵入してこないプレイヤー達にとつて安息の地。流石の茅場もこういった措置はとつていたらしい。（なかつたらクソゲー過ぎる）

「そーですね、少し遅いですがお昼にしましようか」

「イロハとアスナは飯あんのか？」

「ありますけど、せんぱい持つてきて無いんですか？」

「いきなりだつたんだ。準備なんかしてねえよ」

そもそも今日は休日だつたんだ。ああ、ベッドが恋しいぜ。

「ああああのねハチくん！」

「うおっ、ど、どうした？お前も忘れたのか？」

「そうじやなくて…その…」

何顔を赤くしてもじもじしてるの？めちゃめちゃ可愛いんですけど。

「は、ハチくんのお、お弁当作つてきた、から、よかつたら、食べる？」  
は？

「は？」

おつと、思わず心の声が漏れてしまった。横でその手があつたかああああああ！つて喚いてるバカは置いといて今なんて言つた？お弁当、作つてきた、食べる？・アスナが、俺に？おいおいおい、これが本当ならアスナファンクラブ発狂物だぞ。

「あ…迷惑だつたかな」

頼むからそんな泣きそうな顔で見ないでくれ。何もしてないのに悪い事したみたいになつちやつて罪悪感に押し潰されちゃうだろ。

「別に迷惑なんかじゃねえよ」

「ほんと！」

ぱああああ！と擬音が聞こえてきそうなくらいに表情を明るくしアスナはウインドウを操作する。

「せんぱいも罪作りな男ですねー」

「なんで不機嫌なんだ？」

「別に不機嫌なんかじゃないですう」

見るからに不機嫌なイロハと見るからに上機嫌なアスナに挟まれる俺。何この状況。

# 修羅場

「ごちそうさん、美味かつたわ」

「お粗末さまです」

アスナの飯を食い終わり、一息着く。あーもう帰りたい。

「これからどうする？帰る？」

「すぐ帰ろうとするのポイント低いですよ？」

「なんだよポイントつて…」

「ハチくんつてすぐ帰りたがるよね」

「いいだろべつに…」

もう今日は疲れた（精神的に）。早く帰つて眠りたい。レベルに余裕はあるからボス戦が始ままるまでダラダラしてたいぜ。

「ハチくんつてさギルドに入る気はないの？」

「どうした藪から棒に」

「ハチくんくらいの実力者がギルドに入つてくれたら凄い助かるんだよね」

「確かにせんぱい実力だけは確かですからね」

「だけとはなんだだけとは」

「他に何かあるんですか?」

「…無いけども」

そもそも血盟騎士団って服装が紅白で統一するんだろう? あんなめでたい服装なんか恥ずかしくて死んじやうわ。

「ソロで普通にやれてんだ。ギルドに入るメリットが無い」

「それはそうかもだけど」

「てか俺がギルドに入つてみろ。多分俺のレベル高過ぎて敬遠されるわ」

人つてのは自分より優れた奴を妬み、格下を蔑むのが常だからな。目が腐つてる奴が高いレベルだなんてありえないとか言つてきそuddash;うだし。

「そもそも…ん?」

ザツザツザツと規則正しい足音が聞こえてきた。音からして結構な数のようだ。

「あら、両手に花とは随分なご身分じやない」

「そういうお前は随分とファンクラブを連れてるんだな」

「…減らず口を」

「それ、ブーメランな」

フルブレートの部下10人程を引き連れて安全地帯に入つてきたのは自身の身長程

の槍を携え黒髪を揺らす少女。

「モンスターが安全地帯にいるなんて、殺そつかしら?」

「お前じや俺は倒せねえよ」

アインクラッド解放軍副リーダー、ユキノン。しかし副リーダーとは形式だけであり発言力も実力も実質軍のトップだ。

『貴様! ユキノン様に無礼だろう! これだからソロは!』

「私たちの品格を下げるような発言は控えなさい。これに何かを諭すなんて勿体ないわ」

相変わらず嫌われてるなあ俺。別に好かれたい訳では無いが。

「では話しかけなければいいのでは? ユキノンさん」

「そーです! 突つかかって来ないで下さい!」

あの、なんであいつに対してそんなにトゲトゲしいんですかね? ギルド間の無用な争いは避けるべきじゃないの?

「血盟騎士団の副団長ともあろう貴女がこんな低俗なプレイヤーといるなんて血盟騎士団もたかが知れるわね」

「血盟騎士団はこの人の実力を買っています。軍にとやかく言われる筋合いはありません

「実力？こそそそするばかりのこれのどこに買えるような実力があると？」

「少なくとも貴方よりはあると思思いますけどね」

「…はあ」

「なんでこいつらはいつもいつも口を開けば口論になるんだ。もつと仲良くできないのか：」

「せんぱい、他人事のようにしてますけどせんぱいのせいですかからね？」

「…意味が分からん」

「なぜに俺のせいになるんだ。誰に迷惑をかけている訳でもあるまいに。

「彼はレベルだけでならばほぼ間違いなくアインクラッドで1、2を争うプレイヤーです」

「私のレベルは38よ？ それでもまだそんな妄言を言うのかしら？」

「「プツ」「

「あ？」

「ちょっとアスナさんにイロハさん、そんなに煽らないで。怒りの矛先は最終的に俺になっちゃうんだからさ。てかユキノンさんマジで怖い。

「そこのそれが私よりレベルが上だとでも言うの？」

「正しくその通りです彼のレベルは41です」

「自慢するように言つてた癖に下とか、私なら恥ずかしくて死んじやいます」

「何勝手に人のステータス公開しちゃつてるんですかね。てかさつきから取り巻きの視線が俺に突き刺さつてんんですけど。視線だけでダメージ受けそう。

「そこのそれが41?そんなのありえないわ」

「貴方がどう思おうと勝手ですが事実です。用件が無いならもう話しかけないで下さい」

「なんでこの2人はこんなに仲が悪いんだ?初めて会つた時もそうだつた。

あれは確か第十層のボス攻略会議の時だつた。

「初めまして、血盟騎士団副団長のアスナです。今回のボス攻略は私が指揮を取ります」「AINクラッド解放軍副リーダーのユキノンです。よろしくお願ひします」

「…………」

「副団長どうしたんですか?」

「ユキノンはなんどうしたんや?」

しばらく沈黙が続き周囲に不穏な空気が広がつた。

「私、貴方と仲良く出来そうにないわ」

「奇遇ですね、私もです」

これが2人の始まりだつた。

「これ以上此処に留まる必要は無いわね。皆さん行きますよ」

『『ハツ！』』

ユキノンは部下を引き連れて迷宮区の奥へと進んで行つた。

「おいアスナ、もっと仲良くできねえのか？」

「せんぱい、それブーメランです」

イロハ、言うようになつたじやねえか。

「私、ユキノンさんとは仲良く出来そうにないわ」

アスナはキメ顔でそう言つた。……めんなさいそんなに睨まないで。

「おーい、ハツチー」

迷宮区を出て街に戻るとフードを被つた特徴的な喋り方のプレイヤーが待つていて。フワリと近付いて抱き着いて來た。

「アルゴ、何のようだ」

「何のようだとはこ挨拶だナ、せつかくオネーサンが会いに来てやつたのに」

「そんなこと頼んでねーよ」

「それでもＳＡＯ屈指の美少女2人をはべらずとはハツチーもなかなかやるナ」「はべらしてねーよ、むしろ逆だ。てか離れる」

正面からギュッと抱き着かれると何がとは言わないけどふたつの柔らかいやつが当たつてさ、精神衛生上良くないのよ…特に後ろの般若2人からの殺気が。

「ハチくん何デレデレしているの？そんなに女子に抱き着かれて嬉しい？」  
「せんぱい、そんなに嬉しいなら私も抱き着いてあげましょうか？」

「クフフ、ハツチーといると退屈しないナ！」

「…かんべんしてくれ。いい加減離れろ」

アルゴの肩を押して無理矢理距離をとる。般若の殺気も収まつた。あれはボスも裸足で逃げ出すレベル。しかしアルゴも可愛いから悪い気はしないな

「もう、ハツチーたら不意打ちなんてズルいゾ♡」

あれ？なんでアルゴは顔を紅くしているんだ？てかさつきより殺気が（ギヤグにじやねーぞ）ヤバいんだけどなんで？

「ハチくんの節操無し」

「バカ、ボケナス、色魔、ハチマン」

「誰が節操無しだ。しかも後半ふたつおかしい」

ハチマンは悪口じやねえ…違うよね？

アルゴがなんでこんなに俺に懐いて？いるのかはいろいろあつたんだがそれはその

うち話そう。話す機会があつて気が向いたら前向きに善処する方向で検討する。

「それでアルゴは何のようだ?」

「用がなきやハツチーに会いに来ちゃいけないの力?」

「わ、悪くねえけど」

クソ、ちよつとときめいちまつたじやねーか。

「まあ、用事はあるんだけどナ」

ソロである俺は情報が入りずらい。そのためアルゴとふたつの契約をしている。ひとつは情報を定期的に流して貰うこと。しかし情報は昨日貰ったため今回はもうひとつ。

「今日はかなりきな臭いヨ」

不確定で未確認だが気に止めて置いたほうがよさそうな情報は仕入れた時点でおいて貰う事。ひとつめの契約は大して金がないからなかつたがふたつめはなかなか高額だ。本来大ギルドに先立つて送られる情報を優遇して貰っているためソロの俺が教えて貰えるはずはないのだがアルゴ曰く

『ハツチーは特別ダヨ☆』

いつどんな見返りを要求されるか怖いがとりあえずは感謝している。

「それで？ 何が分かつたんだ？」

「オグソーの街の外れにかなり古びた小屋があつてナ、そこに住んでるおじいちゃんのクエストのクリア報酬でゲットした情報なんだケド、変なんだヨ」

「何が変なんだ？」

「おじいちゃんは『この層を守るモンスターは他のモンスターとは比べ物にならないくらい強い』ってサ」

「せんぱい、今どこが変なんですか？ ボスが強いのは今まで同じじゃないですか？」

「まあそれはそうなんだけど、わざわざ言うか？ 普通」

「それはそうですけど」

「今までの層ではそんな情報は出てこなかつた。今回の層は少し気を引き締めなきやダメかもな」

「いつも気を引き締めて下さいよ」

「アルゴさん、他に情報は無いんですか？」

「アーチちゃんもなかなか酷な事言うナ。おじいちゃんのクエストめっちゃ大変だつたんだゾ」

それからおじいちゃんのお使いクエストがどれだけ大変だつたか約1時間愚痴7割で語られた。あれ？ 今日話聞いてる時間長くない？

# 再会

~~~~~

「雪乃ちゃんやつほー！」

「姉さん、突然来るのはやめてちょうどいい」

「だつてチャイム押してもぜんぜん出でくれないんだもの、心配しちやつた」

「…それで今回は何の用事？」

「そんな嫌そうな顔しないで、プレゼントを持ってきたんだから」

「これは？」

「ソードアート・オンラインだよ」

「雪乃ちゃん最近元気ないからさ、これで気分転換でもしたらどうかな？」

「ゲームで気分転換できるなら簡単よね…」

「このゲームは他のゲームとは違うらしいよ？ 物は試しにやってみたらどうかな？」

「…由比ヶ浜さん、 比企谷くん」

「…リンクスタート」

（～～～～）

「はあ…」

比企谷君…もといハチマン達と別れて始まりの街のアインクラッド開放軍の自室に戻った。さつきのようなことは今回が初めてではない。私が前線に出るようになり顔

を合わせるようになつてからずつとだ。本当は彼とちゃんと話がしたいのだけれど彼と会うと、正確には彼とアスナさんやイロハさんが一緒にいる（それもかなりの高確率で）ところを見ると最初に言おうと思っていたことに反して彼の事を罵倒していまう。

コンコン

「ユキノンさん、ちょっとといいでですか？」

「どうぞ」

入つてきたのは2人、軍のリーダーの1人シンカーさんとその付き人のユリエールさん。私の上司に当たる人達だった。

「どのようなご要件ですか？」

「今回のボス攻略で相談したい事がいくつかあるんですが、今大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

さて、切り替えて仕事をしましようか。

「今の所分かつてているのは以上です」

ユリエールさんが現在分かつてている情報を説明する。正直言つて何も分かつていな  
い。この階層に出現するモンスターから鳥獣系のボスである事は想像が付くがそれ以  
外の情報が少ない上に不確かだ。二十五層にはいつからしばらく経つのにこれほど

まで情報が少ないとは、今まではそんな事は無かつた。

「この階層のクエストの進行状況はどうなっていますか？」

「情報屋と軍のメンバーに虱潰しにやつてもらっていますがめぼしい情報ははいつてきません」

クエストからも情報がはいつて来ないと考えられるのは2つ。1つはこの階層のフロアボスが大して強く無いから、もう1つは迷宮区の中に何かギミックが隠されているか、つて所かしら。

「…キバオウ派の状況は？」

「キバオウ本人はほとんど自室にいます。メンバーに関しては普通に攻略に言つています」

キバオウ：彼は第一層から攻略組として前線に立ち今は軍の片翼を担っている。正直私は彼が信用ならない。何か野心を持つていて見える。

「キバオウ派に何か動きがあつたら教えて下さい」

「分かったよ、それとユキノンさん」

「何でしよう？」

「少し休息を取つたほうがいいんじゃないかな？最近前線で攻略したり、軍で働き詰めだろう？」

「しかし、今は二十五層攻略の目の前です。今休むわけには」

「攻略に必要な情報はまだ出揃っていません。ユキノンさんは軍の最大戦力、休める時に休んで下さい」

「…では明日1日だけ」

そう言うとシンカーサンはニコリと笑いユリエールさんを連れて部屋から出ていった。  
た。：彼女のところにでも行つてみようかしら。

翌日、私は軍の本部から少し離れた軍が管理する建物に来た。ここは鍛冶スキルや裁縫スキルといった生産系スキルを持つプレイヤー達が住まう建物だ。ここ二階の最奥

に位置するこの建物の中で一番広い部屋、食堂。ここ)の食堂は軍のメンバーだけでなく一般プレイヤーにも開放されている。私は任務で来れない場合を除き毎日ここに来ている。私達プレイヤーにとって美味しいご飯を食べる事はこの世界で生きる中で一番の幸せだ。しかし私はただ美味しい物を食べに来ている訳では無い。ここにいる彼女に会いに来ている。

厨房に顔を覗かせると数人が夕食に向けて準備を進めていた。その中でピンク色の髪にお団子を作り、夕食の準備を慌ただしく進める少女が一人。

「あ！ ユキノン！」

「こんばんはユイユイ」

ユイユイ…由比ヶ浜さんは現実では料理が壊め…絶望的に苦手だつたけれど、こつち  
では軍の誰よりも美味しい料理を作ることができる。

「…ユキノン今私の事馬鹿にしてなかつた？」

「……………氣のせいよ」

「今の間何!?」

さ、夕飯にしましようか。

「ユキノン!?

「料理スキル持つてないのにユキノンが入れる紅茶は何故か美味しいね！」

「ふふつ、ありがとう」

夕食時の来店ラツシユが終わり客がいなくなつて静かになつた食堂でユイユイと紅  
茶を飲んでいた。

「ユキノンは明日も迷宮区に行くの？」

「明日はお休みよ。シンカーさんが働きすぎだつて言つてお休みをくれたの」

「じゃあさ！どつか遊びに行こうよ！私も明日は休みだし！」

「そうね、そうしましようか」

「やつたー！」

ユイユイは飛び跳ねて喜んでいた。その度に胸の無駄脂肪が…

巨乳なんて滅びればいい

「巨乳なんて滅びればいい

「声出てるよ!?」

あら、私としたことが

「安心して、本心だから」

「安心できない!?」

閑話休題

「ユツキノーン！ こつちこつち！」

第一層の転移門前に集合場所を決め集合する事にして時間の10分前に来たのだがユイユイは既に集合場所に来て いた。

「早かつたのね、待たせてしまつたかしら？」

「大丈夫！私も今来たところだから！」

ユイユイはパステルピンクのかいデイガンに藍色のミニスカート、黒のロングブーツ

と可愛らしい服装だ。

「可愛らしい服ね、似合つてゐるわ」

「ユキノンのワンピースも可愛いよ！」

私は白のワンピースにキヤペリンハットを被つていた。

「私なのだから当然でしょ？」

「あはは…ユキノンは変わらないね」

変わらない…か。何を持つて変わらないと言うのだろう。『雪ノ下雪乃』と『ユキノン』は本当に同じなのか。現実で1人強くあろうとした『雪ノ下雪乃』と、このゲームが始まつた時1人で蹲り何もできなかつた『ユキノン』は本当に同じなのだろうか？…こんな時彼ならどんな風に考えるのだろうと思つてしまふ自分がいる。自分から見限つてしまつたような物なのにはまだ心の奥で彼を頼つてゐる。結局私は彼に依存していただけなのだ。『雪ノ下雪乃』はそれを認めることは出来なかつたが『ユキノン』はそれを理解している。やはり『雪ノ下雪乃』と『ユキノン』は違うのかもしねり。

「難しい顔してゐるけど、どうかした？」

「なんでもないわ。それよりもさつそく行こうかしら」

「そうだね！ ところでどこに行くの？」

「第二十二層の森エリアよ。遊ぶのもいいけどボス戦も間近に迫つてゐるから落ち着ける場所に行きたいの」

「オッケー！ ユキノン大変だもんね。お弁当作つて来たから今日はピクニックだね！」

「ありがとうユイユイ、それじゃあ行きましょうか」

私達は転移門で第二十二層へと向かつた。

「凄いねユキノン！なんか空気が美味しく感じるよ！」

「そうね、でもあまりはしゃぎ過ぎてはダメよ？ 転んでしまうわ」

「大丈夫大丈夫！ ユキノンも心配症だなあ」

「…あなたのことだからあまり楽観もしていられないのだけれど」

「でもまあ、確かにしあいでしまう気持ちは分からなくは無い。木々に囲まれ、程よい日差しが入るこの場所はなかなか居心地がいい。娯楽の類いはほとんど無いがモンスターも出ることはなく落ち着ける場所だ。

「もう少し歩いた所に開けた場所があるの。そこでお昼にしましよう」

「もうお昼だもんね、お腹空いちやつたよ！」

「10分ほど歩くと徐々に木々が少くなり開けた空間が見えてきた。それと同時に誰かの話し声も聞こえてきた。声色から察するに男の人のことだ。まあ誰も知らない場所と言うわけではないし、誰がいてもおかしくは無い。

「カーディナルによるシステムの制約は厳しいけど絶対じゃない、だからその隙間を突けばもつと戦闘の幅が広がると思うんだ」

「確かにお前の言つてることは間違つてないだが実際問題かなり厳しいぞ」

「それでもやる価値はあると思うんだどんなゲームにも裏技は存在するんだよ」

「まあ、俺にとつてもメリットがあるから手伝うけどよ」

そこにいたのは2人の男の人。どちらも黒色系の装備で統一されていて片方は片手剣、もう片方はダガーを装備していた。ダガーを装備した方には見覚えのある特徴があつた。顔は見えないが頭からびよこんと生えているアホ毛、そしてさつきの声、やはり彼は

「なんでヒツキーがここにいるの!?」

「…ユイユイに、ユキノンか。あとヒツキー言うな」

ボス戦でしか顔を合わせていなかつたが半年前はよく見ていた顔比企谷八幡、もといハチマンと黒の剣士ことキリト君がいた。

依頼

『やつぱり私、あなたのやり方嫌いだわ』

『もつと人の気持ちを考えてよ!』

『あいつまだ学校来てるよ、どんな神経してんだよ』

『1人で笑つて、気持ち悪いね』

『君が傷付くことで傷付く人がいることを考えた方がいい』  
『なんで君はそういう方法でしか救えないんだ』

『俺のためにやつたんだ、後悔なんて無いさ…』

「ハチ兄、知り合いいか?」

卷之三

「…まあな」

まさかこんなところでこいつらと会うなんて思つても無かつたな。二十二層はモンスターが出ないから攻略組は来ないし、娯楽も無いから一般プレイヤーもほとんど来ない。来るとすれば釣りをしに池のある方へ行くヤツくらいだ。

「ヒツキー、こんなところでなにしてるの？」

「なんだつていいだろ。あとヒツキー やめろつて言つてんだろ、脳みそスカスカかよ」

「ヒツキーはヒツキーじやん何言つてんの？」

「ゲームの中じやリアルの話しさは御法度だ。半年もこつちにいんのにまだ分かんねえのかよ」

「ハチマン、それくらいにしてあげて。ユイユイはあまり周りの人と関わつていないので  
「んなの俺が知るか、常識だろ」

ユキノンはともかくユイユイは相変わらずイライラさせてくれる。何もできないくせに人の話は聞かない、フィールドに出たら迷惑極まりないだろうな。

「ハチ兄、今日はここまでにしよう。俺は先に帰る」

「は？ ちよつと待て、この状況で置いて行くのかふざけんなよ！」

「でも知り合いなんだろ？ これじやあ俺が気まずいだけだし、ゆつくり話でもしたらどうだ？ それじや俺はこれで」

あいつ、逃げやがったな。キリトがいないなら俺も用はないし帰るか、こいつらと一緒にいたくもないしな。

「んじや俺も帰るから、じやあな」

「待つて」

2人に背を向け帰ろうとするとユキノンに止められた。軽く振り向きユキノンの方

を見ると何か決意したような顔をしていた。

「話があるの、少し時間をくれないかしら？」

正直意外だ、俺なんかとは話もしたくないものだと思っていたがそうではないらしい。しかもいつもみたく一方的にではなくこちらの様子見を伺いながら、何かに恐怖しながら、何かに縋るように。それを見てなんとなく気が変わり話を聞いて見ようと思つた。

「…少しだけだ」

「ありがとう、手短に済ませるわ」

ユキノンは近くの切株の方を指差し歩いて行く。腰を据えて話したいらしい。やれやれ、少しと言つたが長くなりそうだ。

： 何から話そつかしら。ハチマンを引き止めて話をする機会を作つたまではいい。

だけどなんて切り出したらいいかが分からぬ。チラッとハチマンの方を見ると興味なさげに明後日の方向を見ている。

「いつまで黙つてんだよ、話が無いなら帰るぞ」

「…ごめんなさい、話さない訳では無いの。なんて話したらいいか分からぬの」

「纏まつてねえらななら止めんなよ、俺は帰るぞ」

「ちよつと待つて！ユキノンだけじやなくて私も話あるの！」

「…めんどくせえな、手短にしろよ」

「あ、うん、ありがとう。その、なんで来なくなつちゃつたの、奉仕部に」

「来なくなつたつて、来なくていいと言つたのはお前らだろうが。それとも言わなくても分かるだろ的な事を求めてんのか？」

「そういうわけじゃ、無いけど」

「じゃあなんだつてんだよ、出来もしない依頼をノリで受けて俺が解決したらやり方が納得いかない？ふざけんなよ。確かに散々備品扱いされてきたがあれはおかしいだろ。こつちは尻拭いしてんだ。労われど責められんのはお門違いだ。別に労われたい訳では無いがな」

あれは一方的にこちらが悪かつた。彼だけが依頼の本質を理解し行動したにも関わらず、こちらの不手際を棚に上げ、非難してしまつた。あの時に戻れるのなら今すぐ

戻つてやり直したい。でもそんな事は出来ないと分かつてゐる。

「…」めんなさい、許して貰えるとは思つてないわ。あなたにはそれだけのことをしてしまつた」

「謝られたつてなんも感じねえよ。お前らがいまさらどうこう言おうと過去は変わんねえしな。俺は関係を戻そとは思わねえしこつちに来て『本物』になりそうな奴らも見つけたからな」

「…キリスト君にアスナさんね」

「あいつらの言葉に嘘偽りを感じねえし命を預けたことだつてある」

「私達だつて嘘なんか！」

「嘘は付いてないかもしけんが真実を隠しただろ？ 嘘と一緒だ」

「でもそれは、言はずらかつたから…」

「別に言つて欲しかつたわけでも無いが中途半端に近付いてくるのが一番嫌いだ。裏があると思うからな」

「本当に…めんなさい、ただそれだけは伝えたくて」

「俺は俺のために動いてお前らはお前らのために動いた、ただそれだけだ。いまさら謝

「それでもこれはケジメよ。私が前に進むために必要な事だから」

「そうかよ、ならこれでチャラだ。不毛な会話もこれで終わり、ユイユイもいいな?」

「う、うん。ごめんねヒツ：ハ、ハチマン」

「んじや、俺は帰るぞ」

「ええ、また迷宮区で…あら?」

話に集中していく気付かなかつたけれどシンカーサンからメッセージが届いていた。  
休暇の時は滅多に送つてこないのに…なんですつて!?

「ハチマン、無理を承知でお願いがあるのだけれど」

「なんだよ、俺はもう帰りたいんだが」

「キバオウ一派がボス攻略を強行したわ」

「…で?」

「シンカーサンからメッセージが入つてたの。キバオウは自分の派閥のプレイヤーだけで迷宮区へ向かつたらしいわ。キバオウを含めたフルレイドで」

「それで?俺に何をしろと?」

「キバオウを止めるわ、それに協力してほしいの」

「断る、軍の内乱に巻き込まれるなんて御免だ。俺にとつてもメリットも無いしな」「じゃあ依頼するわ、報酬はコルでもアイテムでも情報でも。私が支払える限りで」

虫がいいにも程がある。そんな事は分かつているが今キバオウ達を行かせてしまつ

たら多大な被害が出てしまう。それだけはなんとしても避けなければならぬ。

「俺が受けると思つてゐるのか」

「思つてないわ、ただ現状ではあなたに頼むのが最上だからよ」

「…その依頼を受けるに当たつて条件が3つある。1つ、有事の時の絶対命令権3回。2つ、お前の知つている全ての情報の提示。3つ、俺のやり方に何も言わない。これでもいいならその依頼を受けよう」

「お願ひするわ」

「即決とは恐れ入る。だが本当にいいのか最悪の場合キバオウ一派の安否は保証できんぞ」

「全滅されるよりはマシよ」

「そうかよ、んじや行つてくるわ」

「そう言つてハチマンは駆けて行つた。

「ありがとう、比企谷君」

細々しくも何故か頼りがいのある背中を見ながら私は詳細を確かめるべく第1層へ向かつた。

「…受けたものの、どうすつかな」

二十五層の迷宮区へ向かいながらどうやつてキバオウ一派を止めるか考えていた。そもそもなぜキバオウは攻略を強行したのか。軍が勝手に独自で動けば聖龍連合と血盟騎士団からの糾弾は確実だろう。早く攻略し現実に帰りたい、キバオウはそれを盾に無茶を通すのだろう。しかし突然今までと違うやり方を勝手にするのは他ギルドとの不和が生じ、また他ギルドも各ギルドによる強行にて始める可能性も出てくる。まあ、血盟騎士団は副団長がアスナだし、団長がヒースクリフだから大丈夫だと思うが問題は聖龍連合だな。結構血の気の多い奴らが多いと聞くし、ギルド間戦争にならないとも限らない。それだけのデメリットがありながらなぜ強行したのかが分からぬ。そもそも軍だけ、しかもキバオウ一派だけでフロアボスを倒すことが出来るのか？ 人数だけなら他ギルドで1番だろうが個人の実力で言えば血盟騎士団や聖龍連合に一味劣る。：キバオウがそれすら分かつていかない大馬鹿か、もしくは

「ボスを倒す確固たる切り札があるのか？」

しかし所詮はキバオウ、いくら策を練ろうとうまく行くとは思えない。ここで大きな被害が出れば今後の攻略に支障が出る。全く、ユキノンも面倒くさい依頼をしてくれたもんだ。